

夕顔種

一七〇 夕顔種

(四月二十八日)

今日母親から小包を送つた。予の見てゐる所で開封させた。裕の中に紙包がある。そはしまつた小遣錢を送つたと思ふて開封さして見ると、嬉しや夕顔の種であつた。

車の末路

一七一 車の末路

(四月三十日)

二十五日に車に造られた支那靴は車を取られて公園の一部になつた。

作文を直して怒らる

一七二 作文を直して怒らる

(五月一日)

今日作文を作つたから、訂正して讀んでやると、よろしいといつて怒りつゝ、引き裂いた。

雑誌の注文

一七三 雑誌の注文

(五月二日)

今日雑誌を注文した。其注文は左の通り紙に書いて持つて來た。

少年世界アリマス

日本少年アリマス

小學生コーテ下サイアリマセン

新少年.....

少年.....

新日本.....

少年文.....

英語少年.....

九冊

先生買ふて下さい。

一七四 自分ばかりといつて怒る

(五月四日)

今晚就床時にシャツを着てゐたから、説諭をしつゝ、脱がすと、自分ばかりといつてシャツを障子に投げつけた。自分ばかりといつては自分ばかりやかましくいふとの意ならん。

自分ばかりといつて怒る

輕卒

一七五 輕卒

(五月五日)

何をさしても輕卒である。戸を開けても閉ぢても、百雷の落ち來りしかと思ふやうな音をさせる。井戸端などで洗面する時などの、模様は實に實に亂暴なものであつたが、此頃はナイフや、錐、鋸などで玩具を作つては遊んでゐるが、手に疵をしない日はない位である。

菓子を乞ふ

一七六 菓子を乞ふ

(五月九日)

昨日パンを呉れいといつたのは、間食後早々であつたから、主婦は今も菓子を上げた所でないか、お寺へ遊びに行きなさいといつた、却々行かない。さうして今日は菓子パンを與へたが、食パンでなければ氣に入らぬ、主婦はもう知らぬといつて相手にならぬ。

公園の設計

一七七 公園の設計

(五月十一日)

今日放課後に公園の設計を持參して來たから、よしといふてやると袴も脱がずに、

怒る

一七八 怒る

(五月十二日)

昨日の續きて今朝四時半に起きて、庭前の公園作り(十二坪)をしてゐたので、少しは氣も立つてゐたらうが、算術教授をする時に、一分間に何間駈足が出来るか計つて來なさいといつて、間竿と時計を渡した判からんといつて來たから、教へて上げやうと云つて、太郎と共に立つた。次郎は判からんといつて手帳を投げつけた、予は何ぞ怒るか判からんから教へて上げるのだ何ぞ有難うといつて來ないのだと云つて其儘にした。此の原因は太郎を連れてたか、自分がもう判からんでよいと思つてゐた上へ、強いられたてか何れにしても困つた子供だ。

一七九 棚の摸倣

(五月十三日)

予の室に書棚を造つた。さうすると次郎は大事にしてゐる支那靴を毀はして、書棚を造つた。よく調べて見ると、支那靴二個共毀はした。盗人見て繩をなふの類であるが、こんな事をしてはよくないと注意する。さうすると、此の靴悪いお母さんだんないと

棚の摸倣

頑固にも程がある

いつた。

一八〇 頑固にも程がある。

(五月十五日)

今日十能を土掘りにつかつて捨て、おいたから、洗ひなさいといふと、僕でない三郎さんだといふから、それならばよいから洗つて呉れいと頼んでも洗はない、園婢がいつてもきかない、主婦がいつてもきかないのみならずお母さんに端書で言つてやるはいといつて怒つた。頑固にも程がある。

怒りの減退

一八一 怒りの減退

(五月二十日)

今日算術の時間にノートを破つて口にて噛み室内に捨てたから、紙屑籠に入れて来いといふと室外に捨てたから、又命じると足で庭前へ蹴り出したから、予は又命じた。さうすると後からと云つて行かない、故に予は次郎を抱いて紙屑籠に投げさした。さうすると怒つて教室を出て行つた、主婦が教室に行きなさいといふと先生がイヤといつて来ないのを、主婦が連れて来た。其後は平氣であつた。是迄ならば却々の事であるのに、おとなしくなつた。

鶏と墓

一八二 鶏と墓

(同日)

今日庭前に大の穴を掘つて、鶏を入れた。次郎にはあり得べき事、されども訓練上餘り感心しない事であるから、何かよき方法もやと思つてゐると、恰も好し庭の後の方で墓を捕へて来た。次郎は先生之れ穴へといつた、よしそれならば穴に住んでゐるものだといつて許容した。

一八三 話の始め

(五月二十五日)

今日始めて桃太郎の話が出来た。入園以來にない大出来。

一八四 動物園行き

(五月二十八日)

今日は太郎と二人連れて動物園にやつた。小遣錢に拾錢を渡したが、太郎は守に困つたらしいが、入場券に三錢使つたのみで七錢を持ち歸つた。

一八五 助詞の練習

(六月一日)

助詞の練習

動物園行き

今日墨をする本を讀むなど二三の例を示して、助詞の練習をさして見たが、太郎は二十三種、四郎は十三種まで正確に筆答したが、次郎は誤謬ばかり五十六種も書いた。

洗濯する

一八六 洗濯する

(六月六日)

此頃は却々盛に洗濯をするやうになつた、嬉しい。

三郎を使ふ

一八七 三郎を使ふ

(六月八日)

此頃は毎朝寝てゐて三郎に戸を開けさせてゐる、次郎は人を使ふ能力を備へてゐるが、三郎は使はるゝ能力より備へてゐないので止むを得ないが捨てゝはあけぬ。

殺伐になる

一八八 天候のため殺伐になる

(六月十一日)

昨夕些細の事から三郎を室外に出してお前あつちへ行けといつて怒つたが、今日も終日怒氣を含んでゐた。さうしてどうやらすると三郎を叩く、明日から入梅であるから、天候のために殺伐になつたらしい。

我が弟なら打擲つてやる

一八九 我が弟ならば打擲つてやる

(六月十二日)

今晚主婦と某君が太郎と次郎を連れて買物に出かけた。さうして帽子屋に行つて夏帽を買はせやうといふと、こんなものはイヤだといふ。止むを得ないから冬のを買つてやる。主婦も某君も帽子屋もそれがよいといふにも拘はらず、是れはイヤだといふ。止むを得ないのでいふやうにした。次に硯箱を買ひに行く、一番よいのをといふ。主婦は次のよいといふた。又靴屋に這入つて靴の注文をする。是れも亦小言をいふ。さうして何よるこぶ心もない。温厚な某君も僕の弟ならば、再三打擲てやります。が、なと

雑魚を喰つて見せる

一九〇 雑魚を喰つて見せる

(六月二十二日)

此頃は雑魚を選び出さぬやうになつたが、それでもまだ修養させねばならぬ。意地が悪いと思つたけれども、予は酢の物や汁の中にある雑魚を選び出して、喰つて見せてやつた。

陰で悪い事をして知らぬ顔してゐる

一九一 陰で悪い事をして知らぬ顔してゐる(六月二十七日)

今日洗濯をしゃうとしたから、水を汲んでやつて、井戸の釣瓶繩を持つ時は、此の水で手を洗ひなさいよと命ずると、ハイといつたが傍觀してゐると、却々命じた事はしない。さうして道具なども自由に使用する、さうして何知らぬ顔してゐる。事は小さいが次郎は悪い事をして人に負はせたり、知らぬ顔するだけの悪智慧があるのは、平素看破してゐる所である。

一九二 氣ぜき

(六月二十八日)

最早七月下旬に歸る荷造りをして、自分獨りて七月二十三日には先生と一所に歸つて、鎮守府見に行くといつてゐる。

一九三 身體的變調

(六月二十九日)

此頃次郎の鼻と手足が著しく大人びて來て、一種の變調を來し、ロンブローゾー氏の所謂犯罪者たる徴候を呈してゐる。是れは次郎が餘り度し難いので僻目のやうであるが、決して僻目ではない。來て見る人毎の評である。

氣ぜき

身體的變調

食事が進む

一九四 食事が進む

(六月三十日)

此頃は頻りに食事がすすむ。平素は朝夕を三碗晝食を四碗と定めてあつたが、毎回四碗づゝである。殊に此頃は入梅の季節で、普通のもは食べられないのであるから、注意を與へた。是迄ならば〇〇さん六碗、誰々は七碗といふのであるが、従順にハイといつた。

一九五 氣ぜき

(七月五日)

今日は殊勝にも單物の洗濯をしたから、主婦は糊をつけてやると、氣ぜきにも早く取入れてしまつた。それで主婦はまだ熨斗をして上げねば着られないから、借しなさいといふと、お母さんだんないといつて、其まゝに仕舞つた。數日してから着て見たが、糊のゴハゴハで肌に觸れるので、お姉さん痛いといつて來たから、それだから借しなさいといつたのだといつて後日を誡めた。

一九六 人には人癖

(同日)

人には人癖

氣ぜき

人には人癩馬には馬癩といつて癩のない人はないが、次郎の癩は驚くなかれ、百三十三癩を有してゐる併し癩といふよりは缺陷といつておいた方がよいてあらう。

電燈買ひます

一九七 電燈買ひます

(七月六日)

電燈買ひますとは長い間の希望であつたが、此頃は其慾望が高調して来て、一日に十數回耳に這入るやうになつた。されども今次郎に電燈の必要がない、學園には電燈があつて、終夜照されてゐる、禁ずべき贅澤品であるから、予は次郎にいつた、次郎よ君に必要なものは何一つ買ひ與へないものはない、併し電燈は必需品だから止めよ、斷じて止めよ、どんなに依頼しても決して買ひ與へぬよといふと合點した。

是一つか

一九八 是一つか

(七月八日)

昨日から暑くなつた、寢室に入る時には必らず水を飲む、主婦は湯の冷したのを與へる予は禁じる。故に予と主婦との間に衝突が起る、起つても就床に當つて一旦湧かしたものにせよ飲ませるのは、他の兒童に對してもよくない、予は嚴禁した、所が就床前に臺所に行つて飲んでゐるらしい摸様であつたから、様子を考へて見ると飲んで

ゐるから側に行くとは多感の次郎は既に立腹、お母さんだんないといふから僕は懇々説諭しやうとして接近すると彼は予を叩かうとしたから予もまだ君には叩たかれないうといふ態度で向つたが主婦や園婢が取り押へに来て湯を飲めといふ予は寝がけに何物も飲む事ならん君の身體の爲めだから飲む事ならんといふと次郎は泣いた泣いて就床した寢床にゐて泣いてゐた暫時すると便所に行き唱歌を歌つた。

是て又失敗か

一九九 是て又失敗か

(七月九日)

何時も次郎が休暇になるまでゐた事がない、又家庭もゐた事がない。此の夏季休暇には都合よく返へしたいと思ふてゐたが又二十三日には先生と二人で歸るといつてゐた。昨夜は九時過ぎに安眠したやうであるが今朝は早く覺醒したと見えて三郎が齒磨粉を取りに這入るとあつちへ行けといふてゐる。昨日の續き今日はどうするか捨てゝおく事にした。日曜の事として八時すぎには太郎と主婦は外出し園婢は花子と三郎を連れて散歩した。予は讀書してゐる。さうすると八時三十分次郎は起床して洗面した其内に園婢は歸つた。次郎は他兒や園婢の側へ小言いひに行く、誰も相手になりに行くものがない。園婢があなた悪いから謝罪しなさいといふと却々い

はない十時になつて静かにしてゐるから何をしてゐるかを見に行くと臺所で食事をしてゐる。予は睨みつける彼は平氣なものであるのみならず喰ふだけ喰つてから予に向つて何だやつて見ろと腕まくりをして予に喰つてかゝる。其大膽さには驚かざるを得なかつた。予は君は可愛想な人だと言二言を洩したのみであつたが自分の室に行きて荷拵らえ嗚呼又是れて失敗したのかと予のやり方の拙いのに後悔した。彼はよく自分ばかりゑらさうにといふが恐らく彼が此のまゝ増長したら無政府主義者になるであらう不良少年の最高資格なる人の犠牲を何とも思はぬ晝食の時主婦は歸つて斷はらせやうとしたが却々に謝罪の美德は出來ないそればかりかてない彼の最も愛してゐる公園の竹垣を抜きにかゝつた故に予も次郎と共に竹を引き抜き植木を引き起してやつた。今にも朝顔の笑顔を見ん時になつてゐたが思はぬ悪魔にふみにじられた。止むを得ない、夕食は共にした。

二〇〇 豫想の亂暴

(七月十日)

豫想の亂暴

今朝は昨日の續きで起床時の掃除なども大儀に見えたから容易には命令も守らないだらうと思ふたが昨日打こはした公園の竹で庭の一部は足を運ぶ事も出來な

いから片附けよと命じた。さうするとえらいとか自分ばつかりとか小言をいふてゐたが顔容には今に花咲く朝顔を美しい事をしたと表はれてゐた鎌一挺を與へて片附けよと命ずるとかゝりかけたが塀外に投げ出すそれはそれは亂暴狼籍目もあてられぬ有様であつて。誰一人近づくものもない予も豫想してゐるから驚きもしない。菅若年の某君や主婦が止めさせなさい人を馬鹿にしてゐるのだ餘り好きなやうにさしてはよくありませんなど云つて内輪もめがした予はイヤイヤさうでないマア僕に任しておき給へ案があるからと此の間一時間ばかりで塀外には竹切れが山をなした。予は次郎をよんでこんな亂暴な事をしてよいものかもつときれいに片附けよといふとえらいといつて片附けない。時間が來たので授業にかゝると次郎も平氣でやつて來た。教授をした。休息時間に次郎及び他兒をよびて予も共に片附けた。さうして次郎よ君が片附けたのと今皆が片附けたのとどちらがよいかと詰問して反省させ尙今に此の朝顔の花が咲くのだ早く元のやうにしてやれと命じた。さうすると我獨り見て楽しんでゐた朝顔を予の室に持つて來て見せた。今朝からの次郎のした事と予のした事が次郎の心線には如何に觸れたらうか就床の時には昨夜禁じた水も飲まずに寢所についた。九時頃には天空高くかゝれる月を唯一の清涼劑として今日

の事どもを打語らうたが若年の某君も予の仕方の誤りのなかつた事に同情をよせた。

嫉妬の洗濯

二〇一 嫉妬の洗濯

(七月十一日)

今日は三郎が太郎と仲よく遊んだので嫉妬心を起して三郎を次郎の室より追ひ出したから三郎は太郎の室に來つて午睡した。予を始め皆午睡した次郎獨りは不平と嫉妬で午睡時間中に單衣二枚とシャツ三枚を洗濯した。どうしても普通兒のしな事をしてゐる其行爲はキ印をつけねばならぬ然かもそれが母親に其まゝて決して病人ではない醫師の藥では治療が出來ぬ。

言語の進歩

二〇二 言語の進歩

(七月十五日)

此頃は左の如き言語が出るやうになつた。

- (1) 先生讀本ありますか
- (2) あした又御出てなさい
- (3) 太郎さんどこですか僕はこゝまでですか

學科の進歩

- (4) お金借して頂戴
- (5) あなた寫眞澤山ありますか
- (6) 上げませう
- (7) 來られますか
- (8) 一枚頂戴
- (9) ア、びつくりした
- (10) 何時來られますか

二〇三 學科の進歩

(七月十七日)

◎修身 口答

- (1) えらい人の名を挙げよ
菅公 二宮尊徳翁 塙 保己一 脇田先生 赤堀先生 小波先生 天皇陛下 大將
- (2) 嘘言は何故に悪しきか
狼ニカマレルカラ

(3) 人の家や庭前は何故に掃除する必要ありや

キレイ

(4) 大人になれば何になるか

米會社

(5) 白川學園は善き所か惡しき所か並に其理由

ヨイ所デス 先生

◎算術科

算術科は太郎と同様の問題を試みたるに第一問のみ不出來て其他の六問を二十分間にて正答し得た。

◎作文

甲 白川學園

ニワトリが買ふて行きました又小西様にニワトリがもらつてをります先生と姉さんと皆で鳥をコシラへました僕は作つた公園にきれいでコシラへました僕は臺所へコシラへましたおばあは臺所へこしました先生は臺所へこしらへました皆でこしらへておいしいです又は去年は犬を小さいもらつて一匹をります又赤犬を

死にましたおハカへまいりました六月十日まいりました白川學園に小供がウソヲイフナケンカスルナ申しました太郎さんと一人で晩は話を横着者がやかましがあばれました先生とお姉さんと僕と赤堀先生と太郎さんと三郎さんと花子さん皆で勉強してをります僕一人でカヘルが澤山取つて大きなをります白川學園に公園にきれいな面白い澤山あります

乙 朝顔を上げる手紙

朝顔が咲きましたきれいで面白かつた雨水を咲きましたさし上げますから植木鉢をもつて上げませうか花が澤山上げます

◎讀方及び意義の解釋

讀方も太郎と同様のものを讀ましめたるが皇居をコーンと讀み直段をベタンと讀みて意義は殆ど明かでない。

◎書取

も太郎と同様のものので全部正書し得た其文字は左の通りである。

重箱 塗物 勸工場 焼物 正札附 荒物屋 書物 便利 配達夫 小包郵便

◎會話

- (1) 次郎さん君は何時歸りますか
二十五日ニ歸リマス
- (2) 誰と歸りますか
先生ト イツシヨニカイリマス。
- (3) ○○○へ歸つたら誰と遊びますか
數名ヲ舉グ
- (4) 何をして遊びますか
行軍將棊ヤ、カルタヤシテ遊びマス。
- (5) 白川學園へ何時來ます
九月ニキマス。

二〇四 歸省

(七月二十四日)

歸省

今日午前十時に母親が迎ひに來た。故に何時にない從順に勉強したので大に賞した。其上左の休暇心得を示して暫時別れる事にした。

感謝狀

- (1) 就床前に水或は氷を飲用せしむべからざる事
- (2) 出來得るだけ仕事を命ずる事
- (3) 行儀作法を正しくせしむる事
- (4) 猥褻なる言行あるもの、側へ立寄りしむべからざる事
- (5) 九月歸園の時に金錢の携帯嚴禁の事

二〇五 感謝狀

(八月二十八日)

今日左の感謝狀が來た。

前略 御蔭を以て回は回より柔順に相成り今回の如き昨冬の休暇に比すれば又餘程大人らしく一同狂喜罷在候

乙 二ヶ年間に觀察し得たる次郎の惡癖

次郎は白川學園開園當時より在學の愛兒である。否夫れより以前予が東京にて斯道研究中某下宿屋へまで來てくれて當園の始業を待ちかねてゐた愛兒である。故に予が次郎を知つたのは二年半前の事であつたが教育に着手したのは明治四十二年

次郎の惡癖

七月三日が始めて其以後は日誌に大略記しある如くて開園以來缺席なしに授業を受けたならば五百五十一日の筈であるが種々なる事情のために四百十三日の授業日數で歩合を出して見るならば出席日數七割五分で缺席日數が二割五分である。是れを在園日數授業日數に日曜を加へたるものについて調べると六百四十九日の筈であるが事實は四百七十二日で此の歩合を出して見るならば在園歩合が七割三歩に不在歩合が二割七歩で、二ヶ年即ち七百三十日の中四百七十二日の在園日數である。それで二ヶ年といふものゝ六割五歩の在園になるから正味一ヶ年三ヶ月で月數にすれば十五ヶ月の割合で他の園兒と比較すれば不精勤者である。此の間に次郎を観察し得し事を最も簡單に述べるならば難聴者の不良少年といつてよからうと思ふ。併し是れでは餘り抽象的であるから少々事實に當てはめて論じて見やうと思ふ。而して其事實も諸癖について調べる事が必要であらうと思ふ。それについてはストリウンベル氏が列擧されたる諸缺陷を加藤氏が和譯されたものを標準としてあげて見やう。

アの部

あざける あまのじやく あばれる あそびずき あわてる あきつばい あ

なさがし あせる

イの部

ゐばる ゐきどうる ゐぢきたなし いんぼう いかりつばい いぢりたがる
いぢめつこ いつわる

ウの部

うつたへる うまいものずき うつりぎ うたがいぶかき うぬぼれ うちあ
けぬ うろたへる

オの部

おしやべり おくびよう おしづよい おちつかざる おどける おさへがた
き おんしらず

カの部

かんじやすき事 我利主義 かねほしがり 頑迷 かへりたがる かうこう
がんと 我意を張る かんしやくもち かんがへちがひ かるはずみ

キの部

きまゝ きどる 極端にはしる きゝわけなき きぜん きちがひぢみたる

ぎりしらず さがちる きようはくかん念

くたびれ 空談 空想

けいはく けんかずき けちんぼ

こまちやくれ ごうじよう こうまん こそこそする こんじようわる こ

わしずき こうぜんしん缺乏 くらへじようなき こだい こぢつけ

さむがり ざんこく さんまん さるぢる

しゆうねんぶかき事 しぶとい しんばい しかみ顔する

せんさくずき ぜいたく せつかちにはなす せかせかする

そねむ そこつ そぼろ

だゝをこねる たかぶる 他害心 たいくつ たいにんけつぼう たちのわる

さ 他人の害せらるゝをよるこぶ

ちかめ ツの部

つかれ つらのかわのあつきこと

てさばり トの部

とりとめなき話 黨派的 飛々覺え とめとなき事

なまける なほざり なぶる

ねほり葉ほりさく ねごと

ノの部

のぼせ上る

ハの部

はやがてん はなにかける はんこうしん はずかしがり ばり

ヒの部

ひとりよきこになりたがる ひようずき ふへいか ぶさほう ふじうじゆん

への部

へんしゆう

ホの部

ほらふき ほうびほしがり ほしゆしゆぎ ぼうけん

マの部

まねぐせ まことなき まんしん

ムの部

むとんじやく むりをいふ むごい

メの部

めいよをむさぼる めかしずき

モの部

ものずき

リの部

りをこのむ

ワの部

わからずや わるくちいひ わるだくみ

以上列擧の如く多少異名同種のものあれど百三十三の缺陷たるや多くは習慣となりたる癖が多い。そこで日誌の所にも書いてあるやうに次郎の性は善か悪かに想到した事があつたが次郎に接する多くの人は種々批評する人があるが予の分類からいふならば機關障性、心性、不良性、をかね其上に精神異常性、を加味した、と思ふ。實に次郎が弱者苛めをしてゐる所や高慢が高調して小鼻を動かす所や自己の意志に逆ふ時の態度の横着さ加減は秃筆の盡し得ぬ所て十三や十四の少年とは思ひもよらぬ事である。是れ單に重聽であり母親が我儘にした結果とのみは思はれない

のである。さりながら短所は長所で彼の意志の強固と何をしても最も美なるもの最も大なるもの最も多きものを望むのは教育の仕方により如何ともなるであらうと思はれる。要するに次郎は一種の天才を有する變質者と見てよからうと思ふ。是れ子が最初から多少の望を有して教育しつゝある所以である。

丙 一ケ年間に實行したる次郎の特殊教育

(1) 養護

(イ) 睡眠

次郎が入園前家庭に於ける睡眠時間は殆んど無制限で晝夜の別なく眠らんと欲すれば何時でも眠り眠意到らざれば如何に深更に到りても或は芝居見物に或は將棋カルタ等の遊戯に耽溺したのでさまで不健康といふ程でもない身體をして恰も精神病者の如くに至らしめたのである。故に本園にて睡眠時間を制限したのは次郎のためには少なからぬ利益を與へたのである。

睡眠

體温

(ロ) 體温

體温は常に三十六度七分より三十七度までの間を上下してゐた。

(ハ) 食物

次郎は食物の性質については別に好き嫌ひもなかつた。さうして量に於いても太郎の如く暴食家ではなかつた。さりながら量に於いて時に不同のあつた時は随分注意を拂つた。併し是れは全く家庭の習慣である事が明かになつたが彼は何か自分の目的があると食事をしない事が屢々あつたといふ事である。又ある時には止め度なき暴食をしたといふ事であつたが入園以來も其傾向のあつた事は日誌にある通りである。故に食事については太郎の如き苦心はしなかつたが次郎は性悪であるため餘り食事がすゝむ時は制限の必要を解き聞かせると常に理屈をいふて困らしたが彼が食事のすゝむ時は胃病の兆候であるといふ事が明かになつたから十分の注意を與へた。而して次郎の食事振りについては次郎の性格其儘を表はしてゐた。それを時々作法を教へてやると内ではこうだだんないといつて容易には服しなかつたが

食物

運動

二ヶ年の後には大に改善させる事が出来た。

(二) 運動

次郎は非常な運動好きである。さうして運動好きばかりでない。随分機敏である。此の點に於いては當園の設備上大に不自由を感じた。されど時に効外散歩とか僅かの登山でもすると直ちに足痛を訴へ疲勞を告げては弱根を吐いた。其他次郎の特別運動として試みたものは少なかつたが自由運動及び遊戯は出来得るだけ奨励した。殊に朝夕室や庭の掃除は次郎のために少なからぬ運動をさせたやうに思ふ。又時々川合氏の簡易強健術を行つた事もあつた。

治療

(ホ) 治療

次郎の體質は腺病質であつて常に耳の内外顔面に腫物が出来たが多くは園醫の治療に任かした。二三回齒醫者に通つた事もあつた。又次郎の難聴に付ては入園前に各大家の診断を受けて特殊教育を受けるより道なしといふ事であつたのである。から別に再び診察を受ける必要はないやうであつたが予は捨て、おく譯にも行かな

教授

(2) 教授

いので某専門醫に見せたが鼻腔閉塞症とアテノイドであるといふ事であつたから手術を乞ふたが頑固の次郎は應じないので今日になつた。要するに次郎は性癖のため、病氣を作る事が多かつた。故に次郎が不規律な家庭に居たならば種々なる病氣を續發するであらうといふ事は決して根據なき言ではなからうと思ふ。

次郎の教授振については言語を教授するのが主であつた。故に發音の矯正會話の練習、日誌の記入、臨機言語練習といふ順序で一通り記述して見やう。

(イ) 發音の練習

入園早々五十音について發音の正否を調べて見たが佐行の發音が最も不完全でサを(シャ)シを(チ)スを(チュ)せを(チエ)ソを(シヨ)といひ。又屋行のユをルなどいつた故に先づ第一には舌の運動を試み第二には補聴器を以て正しく聞き取らせる事をつとめ第三にはオルガンによりて唱歌の教授と共に發音の矯正をなし第四には元良博士の視覺練心機を利用して佐行の文字を讀ませ第五には機會のある毎に利用

發音の練習

して矯正をした。此の點については今茲に詳細に述ぶる事の出来ないやうな苦心を試みた。

名詞の練習

(ロ) 名詞の練習

次郎は日に三度三度使用する茶碗や箸の名もいふ事が出来なかつたのである。故に第一には食堂に於ける器具一切の名を教へ第二には次郎の室に於ける名詞を教へ第三には教室に於ける一切の名詞を教へ第四には學園第五には菜園等に於ける名詞を教授したのである。

會話の練習

(ハ) 會話の練習

會話の練習は次郎をして言語界の人とならしめたのに於いて最も有力なる方法の一であつた。其順序方法の大略を記すると左の通りになる。

會話の諸例

(一) 身上に於ける會話例

(四十二年九月二日)

(1) 君ハ何トイヒマスカ

はい僕は次郎といひます

(2) オ國ハドコデスカ

はい……………でございます。

(3) オ父サンアリマスカ

はいございません

(4) オ母サンハ

お母さんはあります。

(5) オ母サンノオ名ハ何トイヒマスカ

はい……………といひます。

(6) 君ハ幾ツデスカ

僕は十二です。

(二) 日常の動作に於ける會話例

(十月十一日)

(1) チャワソカシテクダサイ はい

(2) ハシ ヲダシテクダサイ はい

- (3) ト ラアケテクダサイ はい
- (4) フデ ヲトツテクダサイ はい
- (5) オシイレヲシメテクダサイ はい

(三) 來客時の會話例

(十一月十六日)

(客) ゴメンクダサイ

(次郎) お出でなさいどなたですか……………デス

(次郎) 先生お人さんです……………

(次郎) お上り下さい

(脇田) 次郎さんお茶をお出しなさいたばこぼんをお出しなさいお菓子をお出しなさい

(四) 遠足を利用したる會話例

(十一月二十四日)

- (1) 君は高雄へ行カレマシタカ
はい行きました。

(2) イツ行カレマシタ

十八日に行きました。

(3) 誰ト行カレマシタ

先生とお姉さんと行きました。

(2) 紅葉ハキレイデシタカ

はい却々きれいでした。

(5) 人ハ澤山イツテヲラレマシタカ

はい澤山行つてをられました(下略)

(五) 郷土科教授を應用したる會話例

(十二月一日)

(1) 次郎サン○○○ハ何郡デスカ
○○郡です。

(2) ○○ハドコニアリマスカ
東北にあります。

(3) 町ノ名ハ澤山アリマスカ

はい澤山あります。

(4) 其名ヲ知ツテヲラレマスカ

はい知つてをります。

(5) ……………(下略)

(六) 時々必要に応じて教授したる會話例

(四十三年三月十日)

(1) 墨ノ色ハドンナ色デスカ

黒い色です。

(2) 米ハドンナ色デスカ

赤い色です。

(3) 齒ノ色ハドンナ色デスカ

白い色です。

(4) 次郎サンハ昨日ハドンナ本ヲ貰ヒマシタカ

幼年畫報を貰ひました。

(5) 太郎サンハドンナ本ヲ持ツテオラレマスカ

會話の本を持つてをります。

(七) 畠及び花壇の概念を得させんために作りたる

會話例

(六月三日)

(1) 次郎サン白川學園ニ畠ガアリマスカ

はいあります。

(2) 何ガツクツテアリマスカ

里芋やジャガ薯や大根や豌豆や蠶豆が作つてあります。

(3) 誰ガ作リマシタカ

豌豆や蠶豆は僕が種を蒔きました。

(4) 何時時キマシタカ

去年の十月です。

(5) 太郎サン白川學園ニ花壇ガアリマスカ

はいあります。

(6) 誰が作りマシタカ

僕がつくりました。(下略)

(八) 教科書を應用したる會話例

(1) 瓜ニハドンナモノガアリマスカ

き瓜、まくわ瓜、白瓜、夕顔、西瓜、とう瓜、かぼちやへちまなどがあります。

(2) キ瓜ヘチマ白瓜ハドンナ形デスカ

細長いです。

(3) トウ瓜ハドンナ形デスカ

太いです。

(4) カボチャハドンナ形デスカ

平たいです。

(5) マクハ瓜ヤ夕顔ヤ西瓜ハドンナ形デスカ

まるいのも長いのもあります。(下略)

(九) 買物に行く時の會話例

(十一月十日)

(1) ゴメン

いやらつしやい。

(2) 紙ト筆ト墨ヲ下サイ

はい此の紙はどうですか。

(3) 此ノ紙ハ幾ラデスカ

一帖三錢です。

(4) 此ノ紙五帖買ヒマス

はい筆はどんなのがよろしいか。

(5) 習字筆デス

是れは如何ですか。

(6) 是レ幾ラデスカ

五錢です。

(7) 是モ一本買ヒマス

墨はどんなのですか。

(8) 安イノヲ下サイ

此の墨拾貳錢ですが如何ですか

(9) 是レ貫ヒマセウ皆デ幾ラデスカ

洋紙が十五錢と筆が五錢と墨が十二錢と皆て三十二錢です。

(10) 五拾錢デオ剩リ下サイ

はい十八錢おつりです。

(11) サヨナラ

有りがたう又いらつしやい。

(一〇) 醫者へ行きたる時の會話例

(十一月十七日)

略

(二) 讀本を利用したる複雑なる會話例

(四十四年三月十七日)

(1) 熊ハドコニヲリマスカ

山にをります。

(2) 熊ノ毛色ハドンナ色デスカ

まつ黒です。

(3) 白イ所ハアリマセンカ

むねの所だけ三日月なりの白い毛があります。

(4) ソレヲ何トイヒマスカ

月のわといひます。

(5) 熊ノ皮ハ何ニシマスカ

しき物にします。

(6) 熊イタヅラヲシマスカ

はいします。

(7) ドンナイタヅラヲシマスカ

人の家のくらの戸を明けてかすのこの俵をかついてにげて行くことがあります。

(8) ソレダケデスカ

いゝえ其他川ばたに行つて魚をつかまへることがあります。

(八) 日誌の記入

次郎に言語を教へるのに日誌を記入せしめた事は相當有効であつたやうに思ふ。是れを始めたのは四十二年の十一月十六日からであつたが最初は予等が書いてやつたが四十三年度に至つては獨りて書いた日誌に於ける効果は言語を機械的に練習する事が出来たやうに思ふ。今其二三を記載しておかう。

日誌の記入

(一) 四十三年五月三十日

朝 六時ニオキマシタ

朝飯 七時

御飯ヲタベマシタ

午前九時ニオケイコニ行キマシテ十二時ニカイリマシタ

晝飯 十二時

御飯ヲタベマシタ

午後は一時ニオケイコニ行キマシテ二時ニカイリマシタ

二時三十分ニ牛乳トオ菓子ヲ貰ツテモチトオ菓子ヲタベソレカラアソビマシタ

同六月二十日

六時四十分ニオキマシタ

朝飯 七時

御飯ヲ食ベマシタ

午前九時ニオケイコニ行キマシテ十一時五十分ニカイリマシタ

晝飯 十二時

御飯ヲ喰ベマシタ

午後ハ一時ニオケイコニ行キマシテ二時ニカイリマシタ

二時三十分牛乳トオ菓子ヲモラツテソレカラアソビマシタ

二時五十分ニ太郎サント僕ト花子サントオチヨサント四人デ(氷屋ヲシテ)アソビマシタ(予ノ加筆)

夕飯 五時三十分

朝(三)

午飯ヲ食ベマシタ 晩ハ日誌ヲ書イテ休ミマシタ
 同十月五日
 六時二十分ニオキマシタ
 朝飯ヲ七時ニ喰ベマシタ
 午前九時ニオケイコニ行キマシテ十一時三十分ニカイリマシタ
 晝飯十二時ニ喰ベマシタ
 午後ハ十二時三十分ニオケイコニ行キマシテ一時ニカイリマシタ
 僕ト井上オバ(園婢)ト花子サント三人デオ寺ヤ吉田神社ヘ行キマシテ三
 時ニカイリマシタ
 三時四十分ニフロニハイリマシタ
 夕飯ヲ五時ニイタダキマシタ
 晩ハ日誌ヲ書イテシバラク遊ンデソレカラ休ミマシタ

以上の如く相當に發展の跡を見る事が出来る。さうして第二例にある如き氷屋ヲシテアソビマシタなどは次郎は氷屋を摸倣して遊んだが氷屋といふ言葉が明かになつてゐないので書き方が判からんそこで予に尋ねに來た。此の時の印象は餘程深

かつたであらうと思ふ。さうして此の時に氷屋を覺えたのである。日誌に於いて斯かる機會のあつた事は屢々であつた。尙日誌に於いても訓練上に於いても多少の價値を認める事が出來た去りながら次郎の飽きつばい性癖は何時までも永續しなかつたが言語練習の目的は十分に達し得た。

(ホ) 臨機言語の練習

次郎には言語の世界に生活せしむる必要があつた。起きるから寝るまでは言語の練習をなさざるはなしてあつた。是れがためには主婦は慙なからぬ努力をした遊戯の時間に於いて食卓に向つた時に於いて散歩の途中に於いて言語の練習をした。一例を擧げて見るならばコンニヤクといふ事について殆ど一ヶ年を費したやうに思ふ。無論毎日教へたのではないが食膳に上る毎に教授してゐたが聴き取り難いのと發音が困難であるのと食膳に上る機會が僅少なによつて一ヶ年の日子を費した。それで臨機言語の練習といふのは絶えず機會のある毎に教授したる事。第二には遊戯によりて言語を教へたる事。第三には動作を利用して言語を教へたる事であつた。それで第一の場合には前に述べたやうで多く主婦の努力によつて成効したが特に

教材とした一例を上げて見ると四十二年十二月末に正月の料理の名を教へた如きである。第二の場合の例を舉げて見ると次郎の最も好む勝負事の行軍將碁であるが次郎は勝負事には勝ちを占めても言語上には何一つ経験がない負け勝ちといふ言葉さへいひ得ない故に予は左の教材を作つて行軍將碁に於ける言語を教へた。次郎は好む道であるから多大の興味を以て讀んだ其を記載してあかう。

◎行軍將碁

(四十三年十月二十一日)

僕は行軍將碁をして遊ぶのが一番好きであります。それで誰にでも勝ちます。白川學園でも先生と僕とが戦闘者になつてお姉さんが行司役をしられます。さうすると何時でも交戦口で大將の間者が戦ひますが、まゝには間者が取られたり大將と大將とが組みうちをします。それから中將が出かけて行ますが、其中に澤山な兵士が死にますから工兵を飛ばせまして地雷を掘り起し本城をせめ取ります。中々面白い遊であります。

第三の場合には次郎の動作である是れも詮じつめれば遊戯であるが其遊戯が一

の形に残つた場合をいふのである。此の場合には兒童の心意状態を解剖する事が必要である例へば次郎が何事を考へてゐるか其考へるといふ事實を洞察する事が必要である。さうしてそれが都合よく兒童の考へた場合と教材の考といふ事が符合すれば兒童は考へるといふ言葉の意味を了解する事が出来るのである。又應用する事も出来るのであると思はれる。予は多少此の意味に於て左の教材を作つたが次郎は趣なからぬ興味を感じたやうに思ふ。

◎僕の作つた公園

(四十三年七月十五日)

此頃は暑いので外へ出る事が出来ません。それで何かよい遊びがないかと考へてをりますとお母さんから送つて貰つた寫眞の箱がありましたのでそれに土を入れて其上に苔をおきますと美しい箱庭になりましたから、其庭のまはりには竹を立てました。さうすると先生が見てあ大さう面白いものが出来たとほめてくれましたから僕は又いろ／＼考へてこんどは綿をおいて池をこしらえたり竹に綿をまいて人をこしらへました。中々きれいな庭になりましたからまん中に家をたて、神社をつくり其前には

鳥居と國旗を立てました、又梅や杉や草花を植えました。

さうして白川公園といふ名をつけました。

以上は文章としては破格であつたり語法の間違ひも無いが次郎の自然を其まゝ書いて教材としたものであるから普通の讀本などでは得られない効果を認めたのである。

要するに次郎をして言語の世界に居らしめたのである。

(へ) 作業に於ける言語練習

作業に於ける言語練習

重聴兒に動詞を教へる事は随分困難な仕事である予は此の目的を達せんためには多く作業を利用した、拭くなどいふ事は手真似て出来るが何時までも手真似を使つてをれば聾啞同様の取扱ひである。それであるべく多く作業を命じて一々其言葉を教へた、掘るなどいつても次郎には判からん否判からんではないが何時までも聾啞でおかねばならぬので掘るといふ動詞を教へる時には畠に連れ行きて芋掘りをさせた本を讀む字を書くなどは動作其事を單刀直入に教へた是れが言語教授の實際的教授である。故に動詞を教へるには此の法を取るのが必然的で實際的で將又訓

練的であつたのである。

(ト) 讀本教授と言語練習

讀本教授と言語練習

普通の兒童ならば小學校に入るまでに讀本で言語を教授する事が出来るやうになつてゐるが缺陷ある次郎には普通の兒童の五六歳までの言語を覺える事が容易でない。二ヶ年後の今日に於いても或る事柄に於いては五六歳の兒童の話も出来ない。日誌にも書いてあるやうに次郎は頑固で剛情で生意氣であるから折角進歩の出来る能力を備へながら進歩する事が出来ない。一例をあげて見るならば俗語のイコカイといふ事があるそれを次郎の耳にはイトカイに聞こへてゐるので何時でもイトカイといふ(行カウカイ)それを主婦が次郎さんの方ではイコカイといふのだから直しなさいといつてやるといふイトカイだといつてどうしても直さないといふ風だから性癖のために出来る進歩が幾らおくれれてゐるか判らないのである。如斯状態であるから讀本を教授するに當りては高等小學の本でなければ氣に入らぬ。さうかといつて讀書百遍意味通ずる底の忍耐と能力があるかといふとさうではない。音新らしいもの珍らしいもの人より優つたものをかじりかけをするのみである。

れて常に此の癖を看破してゐたので種々矯正策を講じたが時々太郎と共に讀本を讀ましては太郎におくれつゝある事を自覺させたが最後には全然太郎と同様の書物(尋常讀本の七卷)を讀ましたそれでも次郎はまだ不足で其本を買ふといふ氣にはならなかつた如斯であるから營讀本を讀ますといふのみで普通兒が讀み書き且つ内容の意味を咀嚼するやうな場合には至らなかつたのであるが要するに言語教授の據り所とする讀本について比較的趣味を有するに至つたといふまでである、それで今後讀本を如何に利用するかは次郎の言語教授に大なる問題なのである、

(子) 各科教授と言語練習

今茲に言語教授について各科教授との關係を述べておきたいと思ふが次郎の最大缺點たる言語の進歩は日に一時間や二時間の形式教授で進歩したのではない前にも屢々述べたやうに言語の世界に生活せしめたのである、故に一日に四時間なり三時間の教授時間は悉く言語教授に利用したのである、それで算術の時間に於いても問題を提出する其時には多く聽覺を働かせて口形や顔容などによつて發音の状態を知らすやうな事がないやうに注意を拂ふた、次郎は悪性だけあつて何事につけ

各科教授
と言語練習

ても機敏であつて大抵な事は目で悟つた故に予は前述したやうになるべく聽覺に訴へて正しく聴き取らせる事に注意した、さうして國語科なども多くは次郎の言語發達の階段に應じて教材を作り教科書を用ひたる事は僅少であつた、殊に發音に最も有効であつたものは唱歌であつた、實に次郎が入園當時はオルガンの側に立つてゐても愉快な音調を馬耳東風と聞き流してゐたのであつた、最初には歩調から始めだが二ヶ年の後には君が代を始め三大節の祝歌其他十首ばかりを覺えた、其他手工圖畫などに於いても相當に關係し得たと思ふ、尙次郎の言語教授については記述する事が多いが餘り繁雜になるから一般教授法の所で詳述する事にする、

(3) 訓練

(1) 惡癖の自覺を促したる事

前に屢々述べたやうに次郎は恐るべき多くの惡癖を有してゐた、さうしてそれが次郎の得意と思ふてゐるのではないかと思はれた、甚だしきは吾々が最も同情をよせ氣の毒に思ふ聾啞同様の状態についてまで何等反省する所がなかつた、又普通の小學校から放逐されたについても平氣なもので親の歎けきも兄弟の耻も意には介

惡癖の自
覺を促し
たる事

せなかつたのである。故に予は次郎自身が次郎を知る即ち我を知るといふ事につとめた。其方法の第一手段として努めたのは悪癖の自覺を促した事であつた。併し是れは方法によりては随分危険な事であるが予は此の方法については亂暴ならば亂暴といふ事について教ゆるには亂暴の程度が次郎の亂暴なりし程度以上に上らない事に注意した事であつた。而して此の方法の最もよく次郎の精神界に注入されたのは教室に於いて國語科或は修身科として教へたのが好結果を得たやうに思ふ。其教材を列記すると左の通りである。

- 一 難聴の自覺會話にて (四十二年九月十七日)
- 二 人ニ貰ツタモノハ人ニアゲネバナリマセン (四十三年六月七日)
- 三 諷刺的に吝嗇の自覺を與へたるもの。
- 四 僕は耳が遠い (六月二十八日)
- 五 重聴の自覺を促し併せて親、兄弟、教師の苦心親切を知らしめたるもの。 (七月二日)
- 六 僕は横着者であつた (七月二日)
- 七 次郎の經驗せし範圍に於いて横着の悪しき事を知らしめたるもの。 (七月四日)
- 八 自慢をするな

- 六 諷刺的に自慢の自覺を與へたるもの。 (七月七日)
- 七 なまけものと仕事し (七月七日)
- 八 太郎と次郎の行爲を指摘してなまけものたる事を自覺せしむ、 (九月十五日)
- 九 理屈をいふな (九月十五日)
- 十 次郎の行爲を指摘して理屈いひなる事を自覺せしめたるもの。 (十月十日)
- 十一 おとなしい子供と氣儘な子供 (十月十日)
- 十二 假設的例話により次郎の氣儘を諷刺的に自覺せしめたるもの。 (十月十三日)
- 十三 耳の遠い子供 (十月十三日)
- 十四 假設的例話によりたるもの。 (十月二十日)
- 十五 栗喰つた罰 (十月二十日)
- 十六 次郎の實驗せし苦痛を利用して暴食の癖を自覺せしめたるもの。 (十一月二十八日)
- 十七 僕は何て話が出来ないか (十一月二十八日)
- 十八 次郎は今に自己の最大欠陥の不自由を知らないのて疑問を與へ且つ自覺せしめたるもの。
- 十九 高慢の虎 (四十四年三月二十四日より)

十二回に亘りたるものにて次郎の高慢を諷刺的に自覺せしめたるもの。

注意の練習

(口) 注意の練習

次郎は多く日誌にも記入しておいたやうに多くの性癖と精神病的傾向のために注意の散漫な事は明かであるが實際日々接近してゐた予の目には随分不注意であつた。故に第一に機械的の注意練習をなさしめた其は元良博士の視覺練心機についてであつた。次に遊戯的に注意の練習をなさしめた其はボール投げ輪投げ盆の上の水を入れたる茶碗をおきて水のこぼれないやうに歩ませ多くの木片のある所を歩ましむる等の事をなさしめた。是等は相當の効果があつたやうに思はれた。

(ハ) 自由活動を許容したる事

次郎のゐる所には何物もない何人もゐない次郎あるのみであつた。白川學園は次郎の天地であり次郎の世界であつたのである。是れを小鳥を籠に入れた如くに束縛する事は害あつて益のない事である。故に次郎の病的否變質者の活動をしてなるべく許容した。随つて師弟の區別などは殆んどつけない位であつた。教場も彼等の室や

自由活動を許容したる事

予の室も同様であつた併し放任ではない寛大であつたのである。次郎の目にはどんなにでもなるものと思ふたのであらうと思ふ。其一例をあげて見るならば次郎が予の髭に切端を結びつけてよろこんだやうな事は眞の親子にでもない位であらう。それ位予は次郎のために馬鹿になつて見せたのである。故に随分高調して御し難い事であつたのは日誌にある通りであるが忍耐するに随つて従順になり事理を辨別するやうになつて來た事も明かである。

(ニ) 遊戯中に悪癖を矯正したる事

次郎の悪癖の最もよく表はれるのは遊戯中であつた。殊に次郎の最も好む勝負事においてあつた。例へば行軍將棋や豆はぢきなどをすると我儘不正直狡猾等の悪性が表はれた若しも予等が監視してゐなければ他兒を泣かせても勝を占めやうとした事は屢々であつた。故に時には他兒の排斥する所となつて孤獨でゐた事が少なくなかつた。故に予は勝負事には次郎と同等位であつたが常に正直に綺麗に敗を取る事をつとめてやつた。是れは太郎に於いても同様に只悪癖の種類に差異があるのみであつた。

遊戯中に悪癖を矯正す

(ホ) 修身教授

次郎に對する修身教授は白川學園に於ける全生活が修身教授であるが茲に特に修身教授といふのは教室内で或る時間に教授した修身教材をいふのである。其教材を表示すると左の通りである。

教	科	教材	目的	月	日
1	歌	小野道風	忍耐勉強	四十二年三月十一日	六月十三日
2	身語	勅語	皇恩	六月十四日	六月十四日
3	國語	犬	忠情	六月十六日	六月十六日
4	身語	勅語	孝義	六月廿四日	六月廿四日
5	同	同	行	六月三十日	六月三十日
6	歌	一寸法師	勤勉	同	同
7	國語	白川學園の恩	感恩	同	同
8	身語	萬吉	孝行	七月五日	七月五日
9	國語	僕の金盞と先生の金盞	物を大事にする事	七月八日	七月八日

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
同	修	修	國	國	修	國	修	同	同	同	國	同	同	修
身	身	身	語	語	身	語	身	語	身	語	身	語	身	身
孝太郎の話	時計と寒暖計	勅語	よく直ふかいさいと	先生は親切な人である	勅語	兄さんの手紙	勅語	何でも大事にせよ	人を助けるもの	悪しきものは捨てらる	種まき	長者のいひつけを守れ	友達は中よくせよ	からだを大事にせよ
孝	勤	博	潔	親	友	從	悌	節	同	同	勸	從	友	衛
行	勉	愛	白	切	愛	順	愛	儉			善	順	愛	生
十二月二日	十一月廿九日	十一月廿四日	十一月十八日	十一月十一日	十月二十四日	十月十五日	九月二十二日	九月十二日	九月九日	九月八日	九月六日	七月十四日	七月十二日	七月十一日

本論 第三章 次郎の教育日誌及び其特殊教育概要

33	32	31	30	29	28	27	26	25
同	同	同	修	國	修	國	同	國
			身	語	身	語		語
よい心の人ばえらくなる	便所の側の紫陽花	小池の金魚と溝の金魚	蘭した置とくさつた置	牛と蚊	神様といたづらもの	僕の病氣と神様	なまけもの、丁稚	おとなしい子供と神様
良心の啓發	勸善	同	勤	寛	宗	宗	勤	宗
			勉	大	教	教	勉	教
六月二十七日	六月二十六日	六月二十日	六月十九日	三月二十日	三月十八日	一月十八日	四十四年一月十六日	十二月七日

以上記述した上に悪癖を自覺させた文なども悉く修身教材になつてゐる譯であるが要するに教材中勅語の外は多く時々次郎の精神界を觀察し偶發事項を利用したものであるから文章としては見る價值なきも精神の開發に於いては大に有効であつたやうに思ふ故に此の以後は普通の修身教科書を利用する事が出来やうと思ふ。

(へ) 作法の教授

次郎が入園當時は作法の作の字も知らなかつたので予が人を訪問する時に連れて行く事があつても帽子をかぶりたるまゝ家に這入り室に入るといふ風であつた。故に次郎に作法を教ふるに二つの目的を以て教へた。其一は直接の目的で所謂行儀作法を教へたるもの。其二は間接の目的で形式的にいへば注意を養成するといふ事で實質をいへば沈着にするといふやうな意味であつたのである。そこで日誌にも記入しておいたやうに能力の上からいへば最上であつたがさて作法などになると言語が不十分であるから最下等であつた。但し定つた來客にお菓子を出すとかいふ事に於いては却々上手に出來た。さうして作法教授が次郎の自發的行爲上に如何なる影響を及ぼしたかといふ事の一例を擧げて見ると就床前にお休みなさいといはせたが作法を教授するまでは室の入口に立つて大聲で悪戯半分に先生お休みなさいといつたが作法を教授してからは慥かに其舉動が一變して靜かに跪き小聲にてひとやかに先生お休みなさいといふやうになつた。是れは考へて見ると不良少年などに作法を教授する事は大なる利益があらうと信ずる。

校庭開放

(ト) 校庭の過半を次郎の自由になさしめたる事

是れは次郎に自由活動を許容した事を具體的に説明する譯であるが白川學園の庭過半を兒童の好むがまゝに利用さした草を引かうと木をさらうと苔を起さうと大概な事は寛大に觀過した。但し全然放任といふ意味ではなかつた。此の間には次郎の自由の天地に於いて大なる訓練の出來た事を觀察し得た。此の教訓によつて予は今日多くの小學校に於いて校庭が多く形式的に修飾的に出來てゐるのを今少し兒童のために自然的にして貰ひたいものであるといふ事を悟つた。

作業の獎勵

(チ) 作業を獎勵したる事

次郎は活動が盛である瞬間も靜止してゐない。手が動くか足が動くか實に盛なものであつた。故に學園では庭の掃除より風呂水はり等毎日形の如く行はせた。但し寒天に至つて大に厭ふた事もあつたが其時には強いて命じなかつた。其結果衣服の洗濯までして主婦や園婢を困らしたがそれをも時には獎勵した。さうして是れが次郎のためには運動にもなり訓練にもなりて次郎將來のためには云ふべからざる利益

を與へた事を悟つた。

同情の養成

(リ) 同情の養成に努力したる事

次郎の同情のない事は日誌にある通りであるが入園當時には人が病氣すれば笑ふ泣けば笑ふといふ風であつた。最も普通の兒童でも精神の發達階段に於いては同情のない時期もあるが次郎の如き十二三歳にもなり且つ他の能力は充分備へてをりながら人の苦しみをよるこび他人の悲しみを笑ふといふやうな冷酷漢は多くあるものでない。時にあるも悪性の兒童のみである。故に次郎に同情心を養成する事については特に注意を拂つて見たが流石に人の子である。同情心の萌芽は備へてゐたのである。其一例をあげて見るならば予が風呂水を入れてゐる時に先生えらいか僕が入れませうといつた。其は同情の萌芽の著しきものである。是は予の大に利用すべく乗すべき時であつたので或は具體的に示したり或は教材によりて教訓を加へて見たが今日では從來の冷酷漢ではない。

(ヌ) 教育の權威を示したる事

教權を示す

是れは太郎も同様であるが太郎のは智慧が足らなために教育の權威に感じないのであるが次郎は充分判かりきつてゐる。而して服従しないのであるから何かの機會あらばと思つてゐたが恰も好し本年一月に毎日の如くに僕丁稚に行く白川學園イヤといふから今こそは教權を示すの好機なりと思ふて歸郷を促したのみならず母親をも電報で呼びつけて早く連れ歸り云ふがまゝに丁稚にやる事をすゝめた。そこで母親は予が注文したるよりも以上な苦痛を與へた。此の時に於いて我儘なる次郎には一生忘るべからざる印象を與へた。故に其後時に我儘な事があれば歸宅を促してやると大に失望の態度が見えるやうになつた。是れにて次郎には白川學園が自己の樂園である事が了解されるに至つたのである。

家庭との連絡

(ル) 家庭との連絡を嚴密にしたる事

次郎をして今日までに教育する事の出來たのは家庭との連絡が嚴密に保たれたからである。それも此の家庭が母親一人であるならば早く失敗に歸したであらうが次郎には二人の姉があるさうして此の兩姉の兩婿が次郎の教育に多大の心力をそいだからである。予は此の兩婿に向つて次郎を今日まで予に托したる事について

感謝せざるを得ないのである。而して家庭との連絡についても時々母親の來園を利用しては彼是話すのみで二婿については多く書面の往復であつたが次郎が我儘の起りし時に當りて母親又は二婿より送りたる手紙數をあげて見ると

- 姉婿より來りしもの 三通
- 養子婿より來りしもの 四通
- 母親より來りしもの 十六通

此の母親よりの書面は多く養子婿が書いたのであるが其文意の内容に於いては母親の我儘なる注文を入れて予の只教育より他に何物もなきものゝ意をよく了解して兩者の間を都合よく満足せしめたる所に一層の注意を拂はれた點に無限の情味ある事を察する事が出来るのである。又是れが次郎の今日及び今後に多大なる幸福の潜在してゐる事を祝せざるを得ないのである。尙家庭との連絡については休暇毎の心得なども参考にならうと思ふ。

丁 次郎の變化

(1) 生理的變化

胃が丈夫
になつた

(イ) 胃が丈夫になつた

是れはどれだけ丈夫になつたかといふ事を醫學的に記述する事は出来ないが次郎が食物の量に於いて時々多食をなす事があつたが其は一つの病的に來るものであるらしかつたので當園にて食物の量と性質と與へる時期とを注意したので習慣的に村喰ひをしないやうになつたのであるが一面には胃の活動が常態を逸しないやうになつたといひ得るのである。

便施變化

(ロ) 大便の回数が多くなつた

是れは太郎と反對で次郎の入園當時は五六日に一回の便施であつて其便施時間なども三十分位を費したやうに思ふが是亦常態ではない。固より特例はないではないが普通健康體ならば一日に一回の便施はある譯である。如斯變調をも當園に於いて養護上の注意より今日は毎日便通があるやうになつた。是れ一つでも次郎の狂態を演ずる生理的原因の一を救済し得たものと思ふ。

睡眠が適
たになつ

(ハ) 睡眠が適度になつた

次郎の家庭は睡眠の時間に制限をつける事は出来なかつた加之不良少年の仲間入りをせんとしつゝある折柄とて每晚芝居見物などに出かけては就床時間の亂雜を來したのであつたらうと思ふ。されど當園ではそれを許さず我儘にして頑固なる次郎は時に不満を稱へた事もあつたが予は強硬に出たので次郎の早寝早起きは一の習慣となつたのである。

(ニ) 疲労しないやうになつた

以上の如くであるから生理的に疲労しないといふ事は誰からでも判断のつく事であるが次郎が教室で馭し難たかつた事は性癖の結果でもあつたが又一方には疲労といふ生理的條件も伴つてゐたのである。

疲労しな
いやうに
なつた

(2) 心理的變化

(イ) 感覺

次郎の感覺は性癖のために試験するのは餘程困難であつた殊に味覺などについて大根おろしなどを口にした時に予始め皆が鹹いといふやうな時に次郎に尋ねると次郎は鹹くないといつてがん張る又手など叩いて痛いかといふと痛くないといつて意地張つたが彼は決して痛覺や味覺が欠けてゐるのではなかつた併し非常に鈍であつた又風呂などに這入る時はどうであつたか是れなども太郎の如くに時に熱く感じたり冷く感じるやうな事があつたと思ふが兎に角次郎について感覺の最も正確に試験し得たものは聽覺と視覺であつた其他は感じないのではないが時々變調を來した事は事實であつた又錯覺なども表はるるのではなからうかと思ふやうな事もあつたやうに思ふ而して次郎が入園後感覺に於て最も著しき變化を來したのは聽覺であつた其は入園當時は懐中時計を左右の耳に於いて三寸以上の距離があれば聞く事が出来なかつたのであるが補聽器を以て練習した結果一尺五寸までの聽力を有するに至つたさうしてオルガンの音も馬耳東風と聞き流して居たものが今は或る歌の曲を聞かしてやれば一本調子ではあるが教授しただけの歌はう

(ロ) 記憶

たふやうになつた又讀本などについても予が讀んでゐるやうが太郎が讀んでゐるやうが何知らぬ顔をしてゐたが二箇年の後には太郎が讀んでをれば自分も字を一字づつ突く事が出来るやうになつた故に次郎の感覺については皮膚覺や味覺や視覺については大なる變化も認めないが聽覺に於いては大なる變化を來したといつてもよからうと思ふ。

次郎は視覺に於いて強度の近眼であり聽覺に於いて亦強度の難聽者であるから智識の門戸に於いて正しく出入が出来ないのであるから正確に事物の記憶をなし得ぬといふ事は瞭かである殊に耳より入るものには誤りが多くて言語を記憶する事は随分不得手であつたが個々別々の事柄を記憶する事は普通以上であつた例へば何時幾日に何をしたとか或る事柄は何時幾日であつたかといふやうな事は時々予等の日記を助けた事があつた位であつた故に次郎の記憶については記憶がよくなつたといふよりも正しく記憶する事が出来るやうになつたといふ事が出来る故に次郎の記憶を心理學上より嚴密の意味でいふならば記憶がよくなつたといふよ

注意

りも感覚がよくなつたから記憶がよくなつたといひ得るのである。

(ハ) 注意

注意については非常に散漫であつたから種々なる方法を講じた事は前述した通りであつたが次郎の注意の散漫するには二つの原因があつた。其一は性質が高慢であるために人のいふ事やする事は却々に注意しなかつた。其二は視覚や聴覚に缺點があつたから注意し得なかつたのである。然るに當園にては此の二大原因について大に矯正と練習を施したので注意活動をして順當になし得た事は予の大によろこびとしてゐる所である。

判断

(ニ) 判断

判断についてもさうである。次郎の脳へは不正確な感覚が這入り込むので正しき判断の出来やう等がない。さうして一方性癖のために人の言も容易には耳に這入らないで嘗自分獨り通用する判断をしたのである。

概念

ホ 概念

前述の如くであるから正しき概念の得られやう等がない。殊に言語の概念を得られない事は後に記入する言語發展表等について調べて見れば明かである。其れは普通兒童が言語を覚えるのを考へてもよく判かる事である。が次郎の言語は教へなければ覺えない。又自分で不自由だと思つてゐないから覺えやうとする欲目もない。て一事一物について具體的に教へなければならなかつたのである。が次郎が入園當時の頭腦は水害後の柳原の如きもので根本には荒石があり小砂が溜まり枝葉には切屑紙切れ藁屑が引きかかり幹には泥が塗りつけられてある如きで見るも嘔吐を催すばかりの如き状態である。が白川學園では彼の頭に喜雨を降らせて是等の不潔物を洗ひ流し茲に葉は葉枝は枝幹は幹と明かにしてやつたので茲に概念が明かになつたやうに思はれる。

感情

ヘ 感情

感情については日誌に表はれたる如く消極的であつて次郎が今日まで度し難く

馭し難かつたのは多少知的方面即ち判断の不正なるより起つたのもあつたが又其一面は感情が圓滿でなかつた事が多かつた故に何か次郎に不都合があるとそれを教訓又は矯正しやうと思ふたやうな場合に彼は考へるといふ事をせず直ちに感情に訴へ好意に報ゆるに悪意を以てした。又恩に報ゆるに仇を以てするといふやうな事があつた。さうして同情であるとか宗教上の情操といふやうなものは除り表はれてゐなかつたのみならず人の失敗をよるこび人の苦しみを快とするやうな變質的徴候が甚だしかつた。併し二ヶ年の教育後には喜怒哀樂の醇化した事は固より同情とか宗教的萌芽とかいふものが表はれて來た事は日誌に記入してあるやうである。

意志

(ト) 意志

次郎の意志はどうであるか一面から見れば非常に強固なやうであるが又一面から見れば非常に薄弱であつた事が日誌に於いて明かになつたのであらうと思ふ。そして次郎の意志を一言にしていふならば善事には薄弱で悪事に強固であつた。尙他の言を以ていふならば自己のためには強固で他人のためには薄弱であつたのである。

る。固より兒童の事であるから自己のために強固であれば教育上には何等差支ないやうである。併しそれは程度問題であつて決して次郎の如きを意志の強固といふのではない。さうして次郎は日誌にある如く頑固にして剛情であるにも拘はず單獨では數町の所へも散歩する事が出来なかつた事である。是れは次郎に種々なる缺陷があるために外部の兒童等より迫害されたるために外出すれば不利益を受けるといふやうな經驗もあるからであらうが或る事柄については随分臆病であつた。併し是等消極的の感情をして積極的に向上しつゝある事は事實である。

(3) 教育的變化

(イ) 學科の成績に表はれたる進歩

◎修身

次郎は難聴兒の不良少年といふやうな状態であるから孝行が何であるやら忠義がどういふ事であるやら勅語が何の教であるやら全然判からなかつたのである。所が二箇年の教育は勅語も不十分ながらそこへに讀む事が出來親にはどういふや

學科の成績に表はれたる進歩

うにしたらよいか兄弟にはどう友達にはどうすべきものであるかの初歩位は判かるやうになつて來たのである。其は方法の所で述べたやうに教材によつて如何なる程度まで判かつてゐるかといふ事が判断し得られやうと思ふ。

◎算術

算術は次郎が入園當時には筆算の加法と乗法が少し出來た、それで次郎の算術に於ける能力は全然欠乏してゐるといふのではなかつたが、只無名數に於いて多少の概念が出來てゐたものと思はれる。併し減法と除法は十以下に於いても出來なかつた。是れは全く言語が不十分であつたためであらうと思ふ。故に予は次郎の算術について尋常一年の程度に戻りて一つ二つの計算から始めたが、次郎は言語上の不具者であつて想像とか判断とかいふ如き高等能力は相當に備へてゐた。故に入園以來算術は大に進歩した。さうして次郎の頭腦が比較的理屈的に出來てゐると見えて算術のみは秩序を追ふて進んだ事であつた。是れは予の大に感服した所であつた。

◎國語

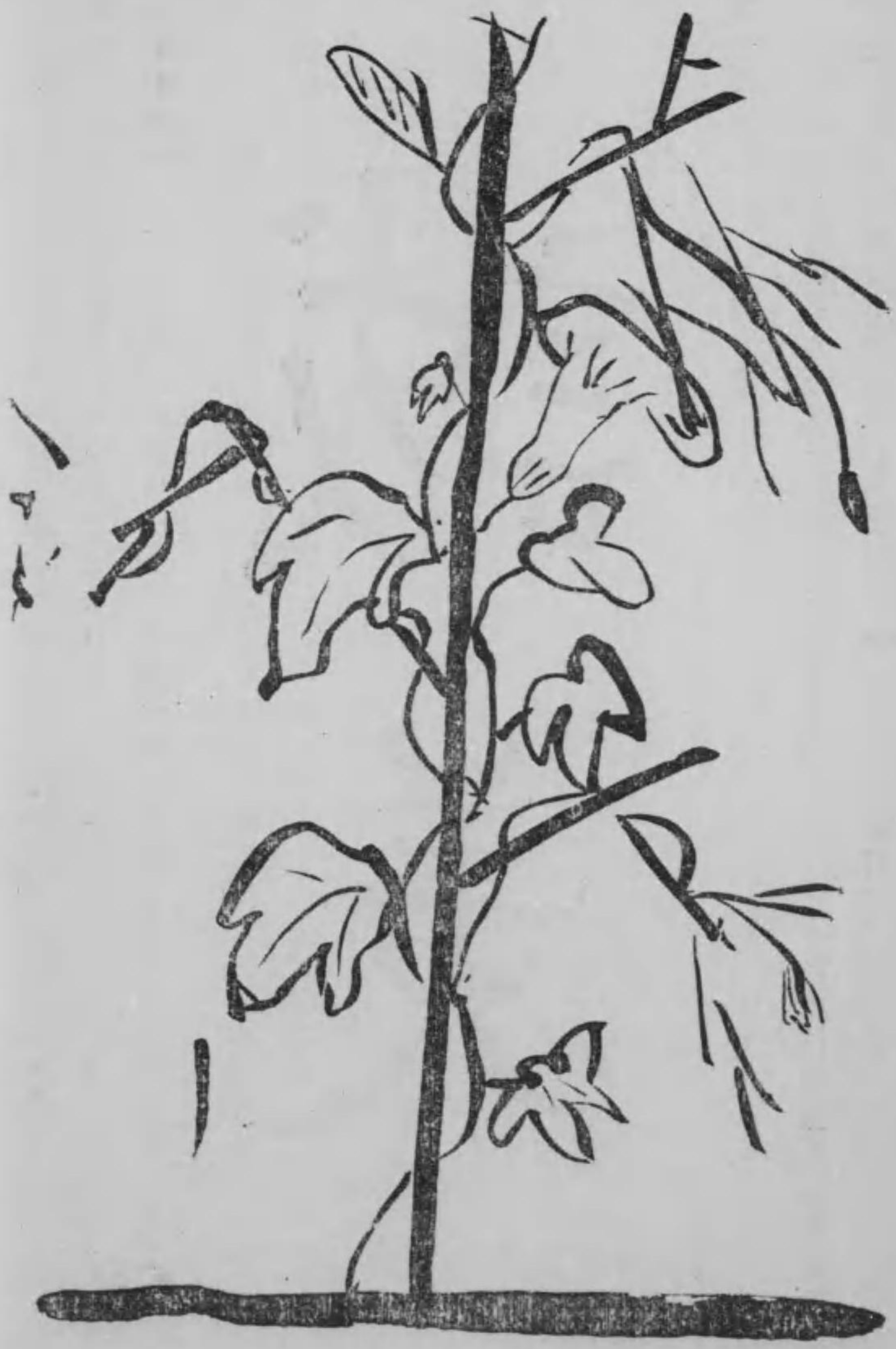
國語については随分困難した場合があつたが、是れも亦五十音の發音より始めた

のであつたが、不十分ながら國定教科書尋常科の七巻を讀ます事が出來た。さうして綴方については試験問題の成績に表はれてあるやうに可なり自己の思想を發表する事が出來てゐると思ふ。書方についても左の如き筆跡を得てゐる。(七月十八日書)

誠美

◎圖畫

圖畫なども最初は自由畫や鉛筆畫を描かせ終はりには専門教員に托して書かせて見たが、十時間ばかり練習した時に左の自由畫が書けた。



以上の如くて次郎の學科教授に於ける結果は何をさせても出來るといふ事に歸してゐるが菅次郎の不得手なものは唱歌であつた併し其唱歌も優美にはうたふ事が出來ないがそこそこうたへた事は教授の所に述べた通りである。

(□) 操行に表はれたる變化

次郎の操行については一種の不良少年であつたのであるから入園後は大なる變化の出來たものと斷定してよい四十二年十二月末に歸國せしめたる時に母親より手紙の一節によりても其變化の著しき事を知る事が出來る。其一節に曰く「言語動作著しく相變はり全く別人の如し」と打語らひ家内一同喜び合ひ候と尙次郎が如何に横着にして亂暴なものでありしかは嘗て母親が予に語りて曰く「先生さんほんまに次郎がおかげ様で人にしてやつて貰ひますのでうれしゅうございます此間も近所のものがようもあんな子供を世話する人があるものだといつてあきれ居りましたとさうであらうさういふ噂の立つのも無理ではなからう前にも再三記入しておいたやうに百三十三の欠陥を有する兒童といふものはさう多くはあるものではない。然らば次郎が如何なる變化を來したかを具體的にいふならばそれだけでも

操行に表はれたる變化

一小冊子の盡す所でない。故に只二三の行爲について變化の一端を記述しやう。
第一次郎は不従順であつた。何一ついひつけても理屈をいはない事はない位であつた。然るに二箇年の後には餘程従順になつた。

第二には粗暴であつた。毎朝の事であるが井戸端に行きて洗面する時に洗面器を静かにおかずに投げおくのが彼の習慣であつたが此頃は餘程静かになつた。

第三には無頓着であつた。禮儀作法などは何所に行つても出来なかつたが今日ではさうではない。多少の禮儀を解するやうになつた。

第四には弱者苛めをした。今日でも時によりせんではないが入園前や入園當時に比較すれば大に變化した。

第五には怒らぬやうになつた。何をいひつけても何を教へても少し自己の意に満たぬ事があると直ちに内へ歸る。お母さんにいつてやる甚だしきは天皇陛下にいつてやるなどいつて狂態を演じたが今日ではさう譯の判らぬ事をいはないやうになつた。

第六には高慢な言動が減じた。次郎は自分の家を以て世界一等の家と思ひ自己を以て世界一のえらものと思つて時々教授にまで小言いつたものである。算術など聞

違つた答を出してゐて是れてよい先生が悪いといつた位であつたのであるが二箇年の後にはさうまで高慢ではないやうになつた。

第七には同情ある行爲が表はれるやうになつた。例へば予が風呂水はりをしてゐた時に先生えらいかといつたやうに又三郎が手を痛めた時に廊下の拭き掃除をしてゐると次郎は君手が痛いから僕が拭いて上げるといふやうな例は數回見受けた。第八長者の命令を守るやうになつた。

第九作業を自發的にするやうになつた。
第十學科に興味を有するやうになつた。

第十一使をするやうになつた。

(八) 言語發達の順序

言語發達の順序

次郎の最大缺陷は言語の出来なかつた事である。而して次郎の性癖の多くは此の言語の出来なといふのが一大原因であつたのである。固より何かの遺傳がありはしないかと思はるゝほどの事も無いが後天的に悪癖を作つたといふ事も確かなのである。而して後天的に悪癖を作つたといふのは次郎が難聴であるために

次郎と養育者の間が全く隔絶されてゐて養育者には次郎の缺點のみが表はれて長所が表はれない故に家庭では否普通の小學校でさへ次郎は馬鹿と見られてゐたのである。所が次郎の全く馬鹿でない難聴者であつて人との交際が隔絶してゐた爲めに家庭に於いて常に意志の衝突が行はれた。其のために次郎の悪癖が増長した事は瞭かである故に次郎の言語發達の順序を記述する事は決して無用の事ではなからう。依つて今茲に特に此の項を設けて一通り述べておかう。

言語發達の順序

手眞似時代

(一) 手眞似時代

明治四十六年七月に入園してからは同九月までは全く手眞似時代であつて予等と次郎とは全く隔絶されてゐたが此の間に補聴器を以て正しく聞き取らす事をつとめた。

名詞時代

(二) 名詞時代

第二には名詞時代に入る事が出来て手眞似が大に減したさうして此の名詞時代は僅かだ。

言語練習時代

(三) 言語練習時代

に入つた。是れは四十三年一月より四十四年三月頃迄が最も全力をそそぎたる時代で此の間に多方面の練習をした。其は前の教授の所にも述べておいたやうに會話を中心として唱歌教授日誌の記入等あらゆる方法を盡した時であつた。

讀本時代

(四) 讀本時代

最後には教科書讀本に最も興味を有したのが四十四年三月より以後であつたが次郎の言語を十分にするには

言語整齊時代

(五) 言語整齊時代

自發的言語

を經過せねば十分なものにはならぬ。

以上の方法的時代が次郎の自發的言語に如何なる形式を以て發表し得たかを次

郎の自發的言語について明かにしておかう。

一 入園當時の言語

チンマイヅル

(新舞鶴)

イコエル

(聞エル)

二 聞き間違へたる言語

(四十二年十二月)

コテタ

(こけた)

ケンカクワルイ

(けんかしては悪い)

トーベン

(小便)

パンダイ

(萬歳)

尙其他は日誌十六にあり

三 自問自答

(四十三年二月二十三日)

此頃に至りて痛イデスカハイ、サウデスカハイなど自問自答の練習をしてゐた。

四 話の始め

(三月六日)

臺灣に肉ありますか。

五 自作文に表はれたる言語

(三月十四日)

今日教室の塗板に左の自作文を書いた。

犬が太郎サン僕ト犬がオケイコガオリマス犬ガワンワンガオケイコガ竹カ二人ケンカオリマス二人デ竹がたゝくが面白イデス犬ガ二人ケンカ泣いてあばいが人犬二人で面白イデス

六 四國順拜中の手紙

一二例

三月廿九日

撫養より

私は今日撫養につきましたから御安心下さい

五月十七日

金刀比羅より

五月十三日金刀羅宮まいりました御安心下さいちかにかいります

附記 四國順拜同行九人なりしも次郎が最上の教育をうけたので

あつたと此の手紙が自發文たるを證明し得

七 意味を誤解したる言語

(五月二十八日)

ナイワイ

(違ふを)

ワカラン

(出来ぬを)

八 自己の覺えたる言語を何にでも利用す

(六月十二日)

書けたといふのを本を讀んでも書けた豆選りをして書けたといふ。

九 完全語

(七月二十三日)

今日予が芭蕉の實を持つてゐると先生ドコニアリマシタカと尋ね、油屋が品物を忘れたのを見て(忘レマシタナア)といつた。

一〇 發音の進歩

(九月二日)

どうしてもチより發音しなかつたのがシと正しくなつた。

一一 副詞

(九月五日)

此頃はア、早イナアといふやうな副詞が出るやうになつた。

一二 抽象語を具體的にいふ

(九月二十一日)

放課になると袴を取らせる休みですかといはずに袴ですかといふ。

一三 動詞を名詞にて表はす

(十月一日)

今日自分の手から血が出たのを見せて赤いといつた。

一四 空間の知覺と言語

(十一月三日)

次郎が空間の知覺をした場合に如何なる言語を使用するかを此頃調べ

て見ると、最初には大キイといふ事をいつたが、次郎には長イを大キイといひ、次には遠イのを長イといひ、次には深イのを遠イといつた。是等は、一具體的の説明を加へてやればすぐにわかる。

一五 數詞の表はれたる言語

(四十四年四月九日)

先生六十八度温イ。

一六 依頼の語

(四月二十日)

僕知リマセン教エテ下サイ。

一七 動詞と形容詞を混同したる語

(四月二十二日)

回轉器が静止したのをヤンダとかトマツタとかいふべきを、ナイといひ、食事のオソイのをナクナルといひ、ソロソロスルといふのをトロトロといつた。

一八 話の始め

(五月五日)

是迄に幾回か話をする事を迫まつたが一度として話してくれた事はなかつたが、今日始めて自發的に桃太郎の話をしてくれた。

以上の如き経路を以て次郎は聾啞の境涯より言語の世界へ進行したのである。其

他は日誌の所に詳記しあり尙一般教授法の所に行きて補遺する積りである。

戊 次郎の教育法より得たる悪癖矯正法

以上によつて次郎が如何なる方法によつて如何なる變化及び進歩をしたかの大體を記入したから、後章に若し次郎の如き難聴にして悪癖を有する児童があつたらば如何にして救済すべきかの問題につき卑見の二三を述べて次郎の教育法を終はる事にしやう。

(1) 家庭にての矯正法

醫師の診断

(イ) 醫師の診断

先づ児童を教育する前に此の子供は教育するだけの心意が發達してゐるか又身體はそれだけに發育してゐるかどうかといふ事を調べる事は肝要である。是は必ずしも異常児のみでない。普通児でもさうしなればならぬと思ふ。況んや次郎の如き児童に於いてをやである。是れ次郎が予に託される迄はあらゆる醫術をつくして

最早教育によるより道なしといふ所に至つたのである。

言語の練習

(ロ) 言語の練習

前にも屢々述べた如く次郎の悪癖の最大原因は難聴にあつたのである。是れ予が第一に言語の練習及び言語の聴取に力を入れた所以である。

(ハ) 長所と短所を知る事

言語の練習をする間には其児童の長所と短所が明かになるからそこで其長所は利用して増長させ短所は矯正しなければならぬ。是れは普通児でも必要であるが特殊の児童を教育するには一層此の明がなければならぬと思ふ。次郎の入園前に於いては此の兩者の鑑別が明かになかつた故に教育困難になつたものゝやうに思はれる。是れは世の父母たるものゝ大に注意すべき事柄であつて多くの父母は長所は見えるけれども短所には氣づかないもので私の子は馬鹿ですよといふ人の口車に乗つて何かの缺點を摘出したならば多くの父母は其の教師の言をよるこばないであらう。されどそれは親の間違ひであなたの子にはこんな缺點がありますよと注意し

長所と短所を知る事

られたら大に感謝をして反省せねばならぬ。然るにそれにも氣づかず曾我子よりえらいものはないと思つてゐると思はぬ後悔をせねばならぬ事があるから心得違ひをせぬやうにせねばなるまい。

愛と權威

(二) 親の愛と權威

次に必要な事は愛と權威である。次郎の母親には此の愛と權威との二つが並行してゐなかつたものと思はれる。次郎ばかりでない世の親といふ親は愛のみ過ぎて權威がなかつたり又權威が過ぎて愛が足りなかつたりして此の中庸を得るといふ事は餘程の賢母でなければ出来ないだらうと思ふ。殊に何か缺陷ある子供であつたならば其缺陷に釣られて權威は何れへか去つて跡形も見えないやうになる。次郎の母親はそれであつたのである。さうして次郎にはまだ同情すべき點がある。それは父がないといふ事である。故に兩親揃つてゐる内ならば父の權威母の愛と兩立するであらうが次郎には全く愛ありて權威がなかつたので諺にも馬鹿程可愛といふ如く次郎は砂糖で苦しめられたのである。甘茶で中毒したのである。眞に子のために最も有害なるものは溺愛である。賞する時に賞し罰する時に罰する事の出来ない親程子の

ために不幸なものはない。されど予は次郎の母親に服せねばならぬ事が一つある。其は先生サンドウゾアンタサンノオ好キナヤウニシテ下サイといつた一言である。而かも其一言は赤心から出てゐるので是れてこそ親の慈悲が酌み取られると思つた。故に予は及ばずながら次郎を教育するには此の二つの調和を試みた積りである。子を思ふ親の心は皆一つどうか世の親達よ愛と權威の調和を祈るのである。食物の調理も鹽と砂糖で調和され、人生も男女兩性の調和によつて人類の向上發展を見宇宙も天地の兩者によつて無始無終に歸一する事を念頭におかれん事を切望するのである。

養護上の注意

(ホ) 養護上の注意

以上根本問題に於いて解決がつかば他は枝葉になるが其一は養護問題である。此の事に付ては茲に特に記す必要を認めぬから略する。

(2) 學校にての矯正法

次郎は小學校にて放逐され數年非教育的な家庭にて徒食し不良少年の状態て入

園し大なる變化と進歩を來し今や普通の兒童として取扱はれんとするに至つたがもし假りにかゝる兒童が或る學校にありとすれば其兒童は特殊の學校へやらねば救済が出来ないであらうかどうかといふ事であるが予は理想を云ふならば特殊の教育所へ送らねばならぬと思ふが一通りの事は小學校でも救済する事が出来やうと思ふ。故に今其一二の愚見を述べておく。

(イ) 言語教授

言語教授については前にも次郎について實驗した大略は述べた積りであるが尙詳細は後章一章一般教育の師に於いて述べやうと思ふが言語教授については第一に發音の矯正第二に名詞の練習第三に會話の練習第四に讀本の講讀第五に演說實習といふ風に進んで行けばよからうと思ふ。

(ロ) 悪癖矯正

悪癖矯正に付ても決して小學校で不可能ではない。兒童其ものゝ悪癖の種類を十分に調査し尙其原因等につき研究すれば獨り其矯正法は案出し得られやうと思ふ。

(ハ) 家庭との連絡

今日の小學校で家庭との連絡問題については十分に研究調査を遂げられて又實行されてゐるが今一層親密に連絡する事になれば決して無効ではなからうと思ふ。

第四章 花子の教育日誌及び其特殊教育法概要

甲 花子の教育日誌

入園前の花子

一 入園前の花子
花子は一種の怠惰兒として又低能兒として某小學校より放逐され家庭にても日の取扱ひに窮したる女兒であつた。

入園申込み

二 入園の申込み

(四十三年四月十九日)

本日午前十一時に入園を申込み四月二十日に母親が女兒を連れて來園した。彼は診査の上音叉を以て聴覺の試験をしやうとした。女兒は私はツンボでないといつた。又兩脚機を以て痛覺の試験をしやうとした。女兒曰く學校ではそんな物は使はないとはねつけた。さうして質問などは何一つ答へなかつた。

入園

三 入園

(四月二十八日)

本日午前十一時に入園した。何等の異狀もない遊戯に豆袋投げなどさしたが別に異狀を認めない。音叉に於いて言動に於いて早熟である事を認めた。

學科の程度

四 學科の程度

(四月二十九日)

算術は一より七まで書き八九十と読み得た。文字はイスハオの文字を書き得た。唱歌は君が代桃太郎をうたひ、裁縫は糠袋を作り得た。

家庭での悪癖

五 家庭での悪癖

(五月二日)

苦い茶を好んで飲んだ。家庭では就床してから間食を與へたらしい。食事の時に魚に骨のあるものを獨りでは食べさしてゐなかつたらしい。

算術の程度

六 算術の程度

(五月三日)

算術は五以下の加減乗除が出来ない。

数の多いといふ事が判からん

七 数の多いといふ事が判からん

(五月五日)

五は四より幾つ多いかといふことが抽象的にも具體的にも判からなかつた。又放課後に頭を計らうといつたらどうしても大きらひといつて計らせなかつた。

八 醫師の診断

(五月六日)

虚弱な方で別に異常はないとの事。但し皮膚の色の悪しきは皮膚の營養不良にて牛乳など飲用すればよろしからんと。

九 睡眠

(五月八日)

今日までは就床してから一時間長い時は二時間も睡眠しなかつたが此頃漸く安眠するやうになつた。又血色もよくなつた。体温三十六度六分である。

一〇 應答の仕振り

(五月十日)

何をいふても一度では返事をしない。又必ず無理屈をいふ。

醫師の診断

睡眠

應答の仕振り

不機嫌

一一 不機嫌

(五月七日)

今朝は起床時に不機嫌で頭痛がするといふたから寶丹をつけてやると其中に起きた。

今日毛糸細工の袋が出来た先生に呉れるといつても容易に呉れない。もうよろしいといへば呉れた。

一二 悪口が却々甘い

(五月十四日)

一昨夜の事園婢が何かをいつたと見えて女兒はヲバ、小便スリヤ雀ガノソク一羽二羽三羽四羽バカリとやつつけたので園婢は大の立腹。

今日母親が来て内がよいか學校がよいかと尋ねると内がよいこんな學校大きらいと女兒の悪口には家族一同を困ませたらしい。

三一 身體検査

(五月十四日)

頭面 四四、

身體検査

悪口が却々甘い

耳前頭圍	二五、
耳後頭圍	一九、
耳顛頭圍	二七、
耳下脰圍	二六、
前後徑	一五、
左右徑	一二、
鼻根後頭圍	二六、
耳孔徑	一一、五
突起徑	九、
耳字鼻棘徑	八、
耳高	七、五
身長	三尺九八
指極	三、八五

葵祭り

一四 葵祭り

(四月十五日)

今日葵祭りの見物に出かけたから其印象如何を試験して見ると左の通りであつた。

- (イ) どこへ行きました
オマツリニユキマシタ。
- (ロ) 何がありましたか
馬車ガアリマシタ。
オチゴサン ハナニツ
キレイナ箱ヲ馬ガヒイテ橋ノ上ヲ通ツタ
ガクタイ
人ガタクサン男ノ人女ノ人、
きれいなものは何でした
馬車 三ツ
- (ニ) いやなもの
多人數ニ押サレタコト。

三個の林檎

一五 三個の林檎

(五月十六日)

今日三個の林檎を二個の箱に入れたら何程宛になるかといふ算術が出来なかつた。故に積木と箱を利用して具體的説明を試みた。

逆に出る

一六 寝てゐなさいといへば起きる

(五月十七日)

今日園婢が起しても起きない。目があいてゐるのに起きない。主婦が起きよといつても起きない。そこで主婦は考へてよしよし何時までなりともお休みなさいといふと直ちに起きた。

一七 知らぬだらうといへば知つてゐるといふ

(五月十八日)

算術の時四ツは何と書くのだ知らんでせうといふと知つてゐるといふからそれならば書いて見なさいといへば書けない。又筆二本と三本とどちらが多いかといつても判からない。

何でもな
い事に泣
く

一八 何でもな
い事に泣く

(五月二十二日)

今日主婦が復習をしなさいといふと直ちに齒が痛くなつた。それで主婦が又イヤな病氣が起つたなといへば泣き出した。大聲はり上げて泣いた。暫らくしてゐると泣き止んだ。どうして泣き止んだのであらうか其は主婦があなた手がきたないネー此の温いお湯で洗ひなさいと命じた。それで泣き止んだ。後は大笑ひであつた。

動物園行
き

一九 動物園行き

(五月二十三日)

今日午前中に動物園に行つたから午後八時十五分に質問を試みた。其は左の通りであつた。

(イ) 花子さん今日はどこへ行きましたか

動物園

(ロ) 誰と行きましたか

先生ト

(ハ) どうして行きましたか

本論 第四章 花子の教育日誌及び其特殊教育概要

車ニノツテ。

(ニ) 動物園に何が居りました

クマ サル イノシシ ライオン タヌキ ハト ツル カニ フン
チヨ

羽ヲキレイニヒライタモノ(孔雀)

(ホ) 花子さんの一番好きなのは何でしたか

サル

(ヘ) 動物園はどんな所でしたか

廣イ所ヤ狭イ所デシタ。

(ド) 熊や猿はどこに居りました。

家ノ中ニ居リマシタ。

(チ) かにはどこに居りました

川ニ居リマシタ。

(リ) 鶴や鳩はどこに居りました。

川ノ廣イ所キレイデシタ又行キタイ。

色の觀念

以上は二十分間の質問であつた。

二〇 色の觀念

(五月二十四日)

白赤黄黒を知つて其他は何を見ても紫といつた。

二一 私は寝てゐません

(五月二十五日)

今朝主婦が起しに行くといふは寝て居りません起きて居りますといふ主婦はそれだから早く起きなさいといふのですといつても却々に起きない。又髪を結んで貰らつてをうて怒つた顔をしてゐるからそんな顔をしていけませんといふと痛いけれども辛抱をしてゐると。

二二 視力と小言

(五月二十六日)

視力は百分の二十であつた。

朝起きなり編物をするから顔を洗ひなさいといへば洗ふ。次に足袋や玩具がまき散らしてあるから片づけなさいといへば小言ダラダラで片附けた。

寝てゐま
せん

視力と小
言

風呂場へ
小言

二三 風呂場へ小言

(五月二十八日)

風呂に入つても小言をいふ婆さんあついうめてくれい這入られませんかお前這入つて見よとは驚くではないか。予は杓に一杯水を入れてやつたらそれですんだ。

行儀を教
へても小
言

二四 行儀を教へても小言

(五月二十九日)

先生足袋貸して下さいと遠くからいふから主婦があなた先生の側に行きて頼みなさいといへばモウヨロシイときつさう變へていふ。

母親の訪
問

二五 母親の訪問

(五月二十一日)

今日母親が訪問したがお母さんが着物買ったのか護謨雪駄買ったのかと詰問した。さうして尙曰くもう歸りたいこんな所いやになつたさうして別に歸らうともしなう。

舞子に行
く

二六 舞子に行く

(六月六日)

今日髪結ふ紐を失ふたといふから探して來なさいといふともうこんな所へは來ないといふからそれならばどうするかといふと舞子(藝者)に行くといつた。

近所の子
供が來な
い

二七 近所の子供が來ない

(六月七日)

隣に九歳になる少女がある毎日のやうに遊びに來てくれて大なる利益を與へてくれる。所で今日で三日間遊びに來ないどうしたのかと尋ねると花子さんが餘りイケヅいひますから二三日來ませんと無理もない筈。

油断が出
來ぬ

二八 油断が出來ぬ

(六月十五日)

太郎の日記にも書いて置いた通り今日の放課後に太郎の室にある押入の中へ二人這入つてゐた。危機一髪の所であつた花子は十二歳の少女なれど顔貌は成熟者の如く入園早々最も注意を拂ふたのは早熟といふ點であつたが果して此の行動を見届けた。ささして何してゐたかと責めたが何知らぬ顔してゐるには驚かざるを得なかつた。實に油断のならぬ奴だ。

昨日の續き

二九 昨日の續き

(六月十六日)

昨日の出来事で顔や指先などの觸覺を試みたが非常に鋭敏である事が判かった。

胸圍

三〇 胸圍

(六月十七日)

五八、五

智識の程度

三一 智識の程度

(六月二十日)

今日算術の時に鳥の足が幾本かと聞くと判からんといふ、犬の足はと聞くと三本だといふ。

髪を結ぶ

三二 髪を結ぶ

(六月卅日)

今日始めて髪が結べた。但し只紐をひすぶだけである。

小便の失錯

三三 小便の失錯

(七月一日)

放課後に遊びほうけて小便の失錯をした。今日で二回目である。

父親の訪問

三四 父親の訪問

(七月三日)

今日父親が来たので荷物を作つて歸らうとする。父親は氣をさかせて花子にだまつて歸つた。其後は別に歸らうともしない。
父親から男性との關係を聞いて見ると、丁稚など、悪戯して守りが出来なかつた。

不足だら

三五 不足だら

(七月十日)

今日母親が来ると予の目前で私こんな所へ来なかよかつたにこんど歸つたら来やしないと母親に告げ口をした。

比較

三六 九歳になる少女との比較

(七月十六日)

今日隣りの子供と遊んでゐたからまさちらした室の掃除と玩具の整理をさして見たが花子はツンと立つて見てゐるのであつた。

感情の試験

三七 感情の試験

(七月十八日)

今日は左の質問に對して左の答を得た。

- (1) 何がすきですか 字ガスキ。
勉強ガデキル。
- (2) 何がいやですか 落第スルノガイヤ。
勉強ガデキマセン。
- (3) 何がこわいですか 先生
- (4) 何がうれしいか シカラレルデ。
唱歌ウレシイ。
何デモ。
- (5) 何が悲しいか オ父サンヤオ母サンニタ、カレルノ。
奥サント先生トオ千代サン。
- (6) 誰が好きですか 何デモ。
- (7) 誰がいやですか オミネサン。

椽先から放尿

三八 椽先から放尿

(七月二十一日)

今朝椽先から放尿したので園婢が注意すると何ババメ何ヲイフノダと小言をい

記憶の出来ぬ片假名

三九 記憶の出来ぬ片假名

(七月二十五日)

今日までに片假名一通りを教へたのであるが如何なる文字が記憶し難いかと調べて見ると左の通りであつた。

- ナヌヘムモユヨラ
- リルレロワキヲ

但し此の女兒には梅子と共に教へたので新文字として教へなければ記憶が困難である事が實驗された。

容 下品な形

四〇 下品な形容

(七月二十七日)

今日軒の雨垂れの落ちるのを見てお婆の小便のやうなと花子らしい形容をする。

早熟

四一 早熟

(七月二十八日)

花子の早熟については種々研究すべき點も多いがまだ醫學的に研究する事が出來ないから當心理的に一二の研究をして見たが男性が手を觸るればよろこび女性。が手を觸れやうとしても厭ふ所あるを以て見れば確に早熟である。そればかりではない來客(男性)が少し愛嬌よくものをいふ人があれば前後を忘れてふざける傾向あるを以ても判かる。

夏休みの心得

四二 夏休みの心得

(七月三十日)

今日から夏季の休暇で家庭へ返す事になつたから左の心得をいひきかせた。

- (1) 起床は如何におそくとも七時
- (2) 就床は如何におそくとも十時
- (3) 油濃き食物を禁ずる事
- (4) 間食は午後一回の事
- (5) 午前中に編物をなさしむる事
- (6) 芝居其他の興業物見物嚴禁
- (7) 丁稚と共に留守居又は散歩を禁ずる事

以上の注意を與へると母親は此の子は男と戯れるのは誰にてもですよといった。

四三 來園

(八月二十三日)

今日午前九時に母親と共に來園したから次郎が歸つたら知らせて上げるから其時にお歸りなさいといつて歸宅させた。それにも拘はらず午後老婆と共に歸園した。考媪がいふには身體もよくなつた。字も書けるやうになつたといつて大さうよろこんでゐるとの事であつた。茲に讀者のために一言したきは大體女兒の如きは夏季の休暇こそ收容しおくべき性質のものであるが太郎と女兒とを休暇中預かりおく

來園

といふ事は甚だ危険な事であると思ふたからである。

寝小便して怒る

四四 寝小便して怒る

(九月五日)

今朝寝小便をしてをつたので園婢があなたは何ですかと問ふと大に怒つた。

太郎と戯る

四五 太郎と戯る

(九月六日)

今日予が午後に隣寺まで行くと次郎は午睡するさうすると太郎と女兒と遊び戯れて目もあてられぬ有様でよろこび興じてゐたとは園婢の訴へてあつた。

色情狂と賣春婦

四六 色情狂と賣春婦

(九月九日)

今日主婦や子供は門外に出て遊んでゐるさうして主婦が歸る次郎が歸る後から太郎と花子が手を引き合つて歸つて来る。又室内では机に向ひ合せになつて太郎と花子は足さきで戯れてゐる。斯ういふ子供の教育を誤ると色情狂や賣春婦になるのではなからうとか思はれる。

寝小便して悪口いふ

四七 寝小便して悪口いふ

(九月十日)

今朝起きて見ると寝小便をしたとの事で園婢がやかましくいつてゐるとあらゆる悪口雑言あいた口がふさがらない。

醫師の診断

四八 醫師の診断

(九月十一日)

本日園醫が來診した。さうして曰く營養佳良にして皮膚のザラザラ少なくなれりと

貳錢銅貨と壹錢銅貨

四九 貳錢銅貨と壹錢銅貨

(九月十六日)

今日始めて錢の勘定をさして見た。さうして貳錢銅貨一個と壹錢銅貨二個とどちらが多いかといへば壹錢銅貨と答へた。是は數をいつたので價をいふ事が出来なかつたのである。

夜分の外出を恐れ

五〇 夜分の外出を恐れない

(十月五日)

ない
泣いても涙を出さぬ
も思はない。盲蛇におぢずの類である。

五一 泣いても涙を出さぬ (十月七日)

今朝三兒が櫛の實の取り合ひをして論争してゐた。主婦が調べて見ると花子が悪い事が明かになつたから断はれといふと断はらないで悪口をいふ。故に主婦は頬をつめた。さうすると大聲はり揚げて泣いたさうしてお母さんにいふてやるお父さんにいふてやる巡査にいふてやると絶叫した。それでも涙は出さないその上に授業を休もうとする。

五二 夜便施の多き所以 (十月十三日)

是れは園婢の加減もあつたらしい。其は一昨日園婢が歸つたので主婦が附添ふて就床する事になつたので明かになつた。

五三 なまける (十月十六日)

花子は遊ばせてさへおけば機嫌がよい。何か仕事を云ひつけると理屈をいふてなまける。

五四 壹錢と貳錢 (十月二十日)

今日算術の時に壹錢銅貨と貳錢とて參錢にして見なさいといつても判からなかつた。

五五 銅貨の區別 (十月二十二日)

銅貨の教授を始めてから一箇月になつたが漸くにして壹錢銅貨と二錢銅貨との區別がついた。

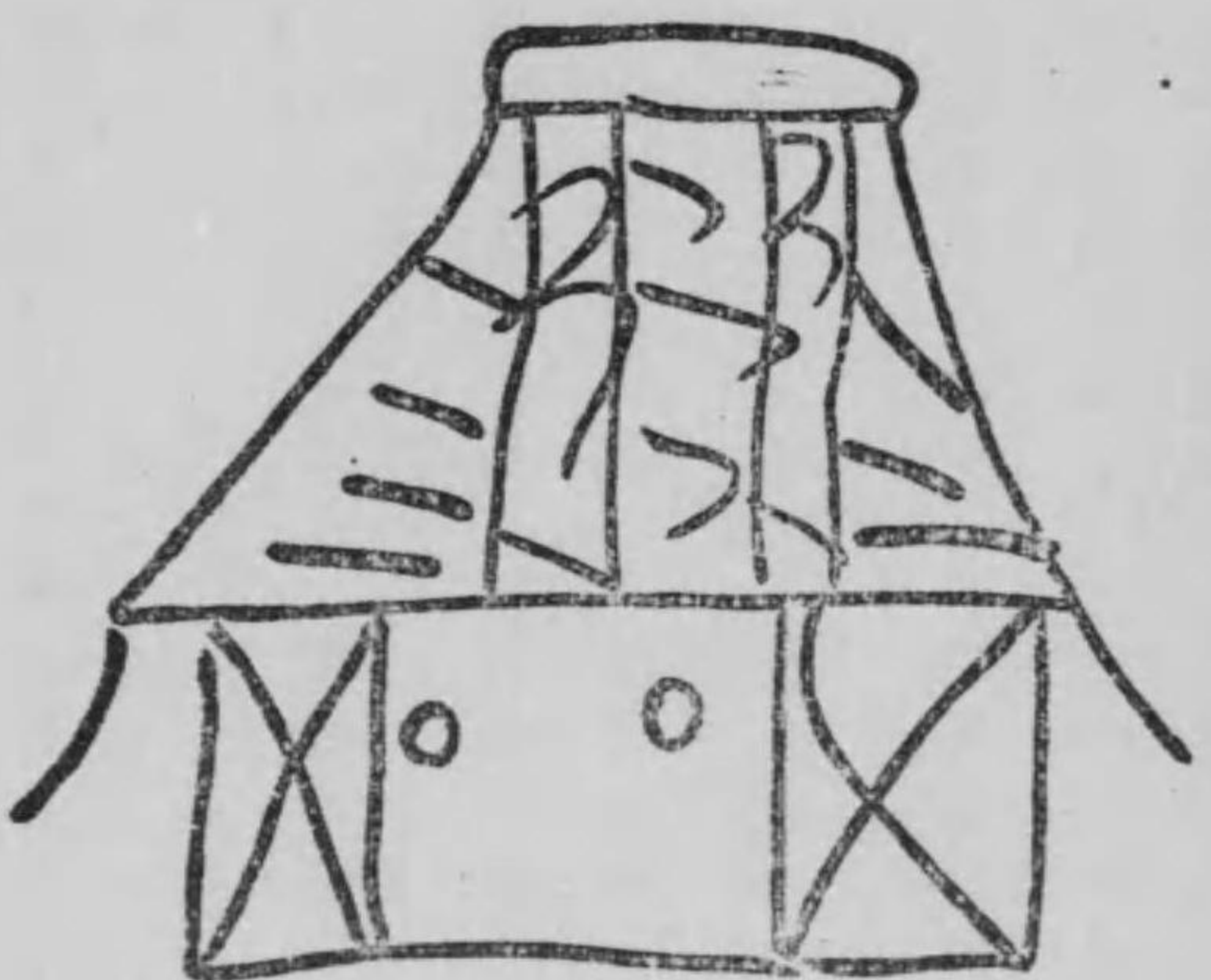
五六 自由畫 (十月二十六日)

此頃花子の書き出したる自由畫は左の如きものである。

壹錢と貳錢

銅貨の區別

自由畫



五七 夜小便に行くのは如何なる理由か (十月二十七日)

此の原因は病氣もあらうが第一には飲食物の不注意。第二には身體を寒冷にする事。第三は入浴したる夜などのやうである。

髪を洗つて貰つても小言

五八 髪を洗つて貰つても小言

(十月二十九日)

今日主婦が髪洗つて上げやうといふと私が洗ひますよろしいといふ。洗へもしないのに。それでも主婦は親切に洗つてやる。さうするとよろこぶどころか小言の數々を並べ立てた。

五九 進歩

(十月三十一日)

此頃進歩した事を何となく書いて見ると左の如きものである。

- (1) 錢の勘定が出来るやうになつた
- (2) ハイといふ應答が出来るやうになつた
- (3) 食後の手傳を否應なしにするやうになつた
- (4) 手工も進んだ
- (5) 畫が書けるやうになつた

六〇 授業前の小言

(十一月一日)

授業前の小言

今朝授業前になつてゐるのに袴をつけないから袴をつけよといふところな所イヤになつたお母さんにいつてやるといつた。又花子には山へ行かうといふと川へ行くといひ川へ行かうといふと山へ行くといふ風がある。今朝も火鉢にあたれといふと仕事し仕事せよといふと火鉢にあたつた。

六一 蒲團の冷たいのがよい

(十一月四日)

今晚就床に當つて昨夜寝小便で夜具がぬれた事が明かになつた。それで主婦が蒲團をかへて上げやうといふとツメタイのがよいといつた。

六二 寒 胃

(十一月六日)

今日は風邪にかゝつて体温三十七度平素より四五分の發熱であつたのがお千代が来てさへをれば愉快に遊んでゐた。其翌日もどうかすると授業を休もうとするから午後は休業させた。

六三 遊び仲間にして貰へぬ

(十一月八日)

へぬ

今日は近所の普通兒が三人も遊びに来た。予はなるべく普通兒の遊びに来るのを歓迎してゐるが何時ともなしに一人ものとしられてゐた。全く遊べないのである。夜はお千代と片假名のカルタ取をしてをつたが却々よい影響を及ぼしてゐた。

六四 教授時間にまで變調を表はす

(十一月十二日)

今日算術の時間に三角一個と四角一個を書けといふと四角を先きに書いて三角を後に書いた。次に四角一個と三角二つ書けといふと三角を先きにして四角を後に書いた。

六五 怒りつゝ掃除をする

(十一月十六日)

今朝は雨が降つて鬱陶敷いので掃除をするのがイヤなため足が痛いといふ。主婦がもうよろしいイ、エはきますといふ。予もはくと云ふイ、エといふけれども掃かない。故に大喝一聲を試みたさうすると小言いひく掃除して後は鼻歌うたつてゐた。

教授時間
にまで變
調を表は
す

怒りつゝ
掃除をす
る

正 添口の矯

六六 悪口の矯正

(十一月十七日)

今日花子が次郎の茶碗を過つて割つた。そこで主婦が犠牲になつて次郎さん茶碗を割つたけれども堪忍して下さいといつた。故に予は主婦にいつた何ぜ花子に断はらせないとさうすると主婦は次郎が何時までもいふからですと答へた。そこで予は女兒に云つた人が過ちしても小言をいふてはならぬと訓示を與へた。

始めての寒さ

六七 今朝は始めての寒さ

(十一月十八日)

今朝は始めての寒さ寢室四十度昨夜は二回まで小便に行つた。さうして起すと頭痛がするといつて主婦が起して着物を着せてやつた。さうして園婢に診察を受けたけれども何等の異常もなかつた。

六八 他所に行つても變質を表はす

(十一月十九日)

今日通學の梅子が缺席したので主婦が花子を連れて訪問した其時にあ上りなさいといはれるとイヤですといつた。

他所にいつても變質を表はす

虚言

六九 虚言

(十一月二十日)

今日は園婢も居ない通學の梅子も兩三日病氣で來ない次郎は主婦が連れて出たので獨りになつた。そこで授業を受けるのが淋みしくなつたらしい故にもイヤになつた歸りたくなつたといふ。何ぜですかと質問するとお姉さん(主婦)が私の毛絲を取られたからイヤになつたとさうも事實らしくいつたよく調べて見ると全くの虚言であつた。

雑誌の讀み初め

七〇 雑誌の讀み初め

(十一月二十一日)

昨夜幼年畫報を始めて讀み得た。さうして今日は五十音の中リヲが少し出かねたが其他は正しく讀み得た。

始めての手紙

七一 始めての手紙

(十一月二十三日)

今日手紙を書かせて見たが左の如きものが書けた。

オトウサンゴキゲヨロシイカ、オカサンゴキネンヨロシイ、オコタモ、セカラモア

本論 第四章 花子の教育日誌及び其特殊教育概要

リマスカラゴハシテクラサイ

七二 反對に出れば使ひやすい (十一月二十四日)

今日机を運ぶに重いといつて動かないから普通の子供ならば何そんなものが重いかといふべき所であるが何でも反對に行けば面白い結果を見る事があるからア、ア、重い重いといつてやつたら奮發して目的の所まで持運んだ。

七三 次郎にも戀々とする (十一月二十六日)

今日次郎が花子の机を次郎の室に持ち行くともう花子は次郎に戀々として主婦が呼んでも何とか彼とか理屈をいふて次郎の室を出ないさうして今日夕刻にアヤシキ畫を貰つて見せに來たが何時貰つたのかといふと昨日貰つたといつた。さうして花子は常に丁稚の夢を見るといふから皆が留守の時に調べて見ると下らぬ話をしてゐた實に捨ておきならぬ………た。

七四 仕事 (十一月二十七日)

次郎にも戀々とする

反對に出れば使ひやすい

仕事

花子は何の仕事も出來ない茶碗を洗ふ事も室の掃除も髪結ふ事も年相應の事が出來ないで只命ずれば悪口いふのみである。

七五 好きな丁稚 (十一月二十七日)

夕食の時に指折り數へては何やら物待ちであつたから何を數へて居るのですか誰かに合ひたいのですかと種々聞いて見ると好む丁稚の名をいつた。

七六 いふなといふ後から悪口 (十一月二十八日)

今朝花子さんのやうに何をして上げてもいやだとかきらいだとかいふと私やお父さんやお母さんこそ大事にして上げるけれども人は皆馬鹿だといつて笑ひますよといふと其後からすぐに悪口雜言を吐いた。

七七 感動したらしい (十二月一日)

予が花子の足の爪をきつてやると主婦が側に見てゐて足の爪まできつて下さる先生があまりますかありがたく思ひなさいといふと少しは感じたらしかつた。

好きな丁稚

いふなといふ後から悪口

感動したらしい

何が欲しいか

七八 何が欲しいか

(十二月七日)

今日主婦が外出したので何か欲しいものがありはしないかといふとケシゴムと色鉛筆を買つて呉れいといつたのは子供らしく嬉しかった。

七九 主婦の手傳

(同日)

予は十月十日以來予等の行爲が何處まで兒童に影響するものであるかといふやうな事を実験して見たいために園婢なしに暮して見てゐたが昨今其効果が現はれかけて來た。茶碗を洗ふ事や食事の準備など主婦の手傳をするやうになつた。又試験をするからといへば勉強するといつてきばつたのは殊勝であつた。

八〇 算術の試験

(十二月十日)

今日左の算術問題が出來た。

- (1) 一より二十まで 記數法
- (2) 三十の〇を書け

算術試験

主婦の手傳

- (3) 柿五つと三つで何程
- (4) 五つの蜜柑の中三つを食へば残り何程
- (5) 五錢白銅貨一個と一錢銅貨一個で何程
- (6) 一錢と二錢で何程
- (7) 紙三枚と二枚とで何程

八一 云ふて聞かせて怒られる

(十二月十日)

今晚机にひぢづきになつて裁縫してゐたので主婦がそんなお行儀の悪い事ではいけませんといつて聞かせると益々行儀を亂すので主婦は足を叩いた。さうすると泣きつゝ左の如き悪口をいつた

- ボーヅアツチイケ
- オ金ギョーサンイル アツチニオツタラナンニモイラン
- ジュンサニイツタラ バツキントラレルワ
- オカアサンヤオ父サンニイフテヤロ
- シラン

云ふてきかせて怒られる

ボーゾアツチヘイケ
ナンデモ ナカセイ
オカアサンニイフテヤルワ

餘りの事に主婦も怒つてお前見たやうなチツボケナモノニ何だ外へ出してやるぞといつた。女性の感情的なる無理もない話であるが予は花子の行爲のよくないのを見たから主婦に謝罪さした其後は唱歌をうたつてゐた。

八二 寒いで箒が持てない

(十二月十一日)

今朝は六花さへ飛び散りて寒暖計は三十度まで降つてゐた。故に花子の受持として一坪に足らぬ庭の掃除をさす事にしてゐたのが最早寒いので箒が持てない無理もない話であるから寒い間は庭の掃除をさせない事にした。

八三 書方と讀方の試験

(十二月十二日)

左の試験がよく出来た。

アメ ハタ コマ コトリ カサ ツル シカ ハサミ クモ ミカン タ

寒いで箒
が持てない

書方と讀
方の試験

ケ フネ

(以上書取)

キク スズメ ヒバチ サルトカニ ハサミトモノサシ ナシトミカン
(以上讀方)

八四 多忙な時は邪魔になる

(十二月十三日)

昨日我儘の次郎が寒くなつたので歸國するといつて駄々をこねたので主婦は親切にも郷里まで送つてやつた爲めに予は炊事も教授もしなければならぬ事になつた。花子が普通の子ならば十二歳にもなつてをれば室の掃除位はしてくれる筈であるのに多忙な程益々邪魔になる。

八五 足袋がはけぬ

(十二月十六日)

今朝は三十二度の寒さ足袋はく事も羽織着る事も出来ない。されど食ふ事のみは一人前。

多忙な時
は邪魔に
なる

足袋がは
けぬ

仕事をい
ひつける
と病氣が
出る

八六 仕事をいひつけると病氣が出る (十二月十八日)

此頃は大に減じたけれどもそれでも仕事をいひつけると病氣が出る今日も夕暮に茶碗を拭けといふと手から血が出ますと訴へる、又仕事をいひつけられやうかと思ふて針小棒大に訴へる。

太郎の再
來をよろ
こぶ

八七 太郎の再來をよろこぶ (十二月十九日)

今朝は何日のない袴を早くはいて學校に行つた、其は太郎が來るといふ事をきいたからである。さうして教室にをつても絶えず太郎の方ばかりを見てゐる、又幼年畫報を出して見せぬばかりにしてゐた

人をかけ
る事が上
手

八八 人をかける事が上手 (十二月二十日)

今日主婦が毛絲を買つて來て歸つてゐるとお姉さん此間のを忘れたてせうといつて買つて來て下さつたかとはいはない。

立聞きす
る

八九 立聞きする (同日)

今晚食事の時に主婦が人様が來られたりお母さんが來られて先生が御話してゐられる時にはそばに行くのではありませんと云ひきかせると、何ぜですと理屈をいふからお行儀が悪いからだと云つてきかせると、お母さん好きですから行きます。さうして内でお客さんがありますと何時でも戸の外から聞いてゐますといつた

九〇 馴れた (十二月二十三日)

花子は何所へ遊びに行つても牛乳を飲む時に歸らない事はない。遊び戯れて食を忘るゝのでなくて食ふために遊びを忘れるのである。今日も隣りへ遊びに行つたが二時に歸つた菓子と菓子を與へると菓子イヤだから豆を呉れいと云つた馴れて仕舞つた。

九一 賞與 (十二月二十四日)

今日年末賞與として讀本一冊を與へた。さうすると大によろこんだそれはよかつたが開いて見ると尋常讀本の一であつたから嗚呼カナンといつた。

賞與

馴れた

九二 休暇心得

(十二月二十四日)

冬期休暇で母親が迎ひに來たから左の心得を注意した。

- (1) 炊事の手傳をさせる事
- (2) 大食をさせぬ事
- (3) 夜深しをさせぬ事

九三 歸園

(四十四年一月十四日)

今日母親が連れて歸園したが何か變つた事がありますかと尋ねると有りがたう年が大きくなりましたので大分しつかりして來ましたが一月三日に一回寝小便をいたしましたと又花子はお父さんが白川學園は小さい子の行く所だからもうよしにしなさいと云つたと云つた。さうして母親が歸る時に主婦にいふにはさあ是れて暫らく極樂だと。

九四 男兒に戯る

(一月十六日)

今朝起きて次郎を相手にしてゐてグズグズしてゐた所へ主婦が何してゐるのですかと云つたから予が次郎を相手にしてゐるのだといふとそんな事いふともつとしてやるのだと云つた。又太郎の側へ行つてゲラゲラ笑ひをしてゐた。どうも花子の男兒に戯るるのは普通の女兒のとは違ふ所がある。

九五 變調

(二月二十日)

今日夕食の時花子さん風が全治せんからお藥を飲まして上げやうといふとワタイもう藥いらんだいきらいといつた。

九六 牛乳と牛肉

(二月二十一日)

今日午後隣家で夢中になつて遊んでゐたが牛乳飲むだけは忘れずに催促に歸つた。又今夕は主婦が外出して歸りがおそかつたので花子のみは牛肉の副食を與へて食べさせた。さうして予は主婦の歸りを待つて少し長く食膳についた。さうすると隣りへ行つて私に牛肉少しよりにくれないと云つた。花子は女性で低能で而かも繼母に育てられただけになさけない事をいふ。

シンキク
サイ

九七 シンキクサイ

(二月二十二日)

此頃は次郎も歸國した園婢も居らぬ予等の花子に對する影響の最も現著なる時である。花子はシンキクサイモウ歸りタイといふからさうですか私は花子さんに來て呉れいといつて頼んだのでないから早く歸つて下さいといふと大に失望してゐた。

三大美事

九八 今日の三大美事

(二月二十三日)

今日は三十二度の寒さにも拘はず朝早く起きて庭掃きをした夕刻には戸をしめやうとしてくれた是れは昨日歸つてくれるといつた結果だらうと思ふ。

ハイとい
つた事が
ない

九九 何を云つてもハイといつた事が無い(二月二十四日)

晝食の時着物を汚したから汚さぬやうに食べなさいといふとぬれた手拭で拭ひますといつた。又茶碗の外まで御飯をつけてゐたから氣をつけなさいといふと私が洗ひますといつた。さうして御飯がすむとア、頭がダルイと驚くではないか。

お千代は
主人公

一〇〇 お千代は主人公

(同日)

お千代が出て來ると直ちに机に向つて花子さんかうしなさいあゝしなさいと云ひつけるとそれを花子は甘んじてゐる。又お千代もそれが面白いので毎朝毎晩遊びに來るのである。

諺をつか
うとして
考へた

一〇一 諺をつかうとして考へた

(二月二十五日)

今朝食時に頭髪がきれいに結んであつたから誰が結ひましたと聞くと暫時考へてゐた。さうして予がお姉さんですかと今や口外せんとする時お姉さんですといつた。故に予はすかさずお姉さんに結んで貰つたのならばすぐにお姉さんに結んで貰ひましたといへばよいのだと教訓を與へた。

一〇二 自分の勝手な時に諺をいふ

(同日)

今晚隣りのお千代さんの所へ行きますといふからお千代さんは來られるでせうといふと今晚はお千代さん來ないといひました。さうして私が迎ひに來てくれたら

自分の勝
手な時に
諺をいふ

行きますといつた。故によく調べて見ると來人があつて來られない事が明かになつた。又お千代が何ともいはなかつた事も明かになつた。是れは全く自分勝手な謙である。

笑ひ方と泣き方

一〇三 笑ひ方と泣き方

(二月二十五日)

笑ひ方は妙齡の婦人のやうな笑ひ方。泣き方は何事が起つたやらと思ふやうな大音聲はり上げて泣くが涙は少しも出さない。

反射的摸倣

一〇四 反射的摸倣

(二月二十六日)

花子はよく真似するから今日晝食の時に主婦が蛤の吸物より蛤の殻一個をはさみ出して食卓の上におくと其通りにした。

お千代に一心にな

一〇五 お千代に一心になる

(二月二十七日)

夕食がすむと直ちにお千代さんをよびに行かうといつて寒天の開い夜をも厭はずに門外に出てお千代の門前に立つてゐた。主婦は花子さん此のくらしいのにはい

何をして遅い

一〇六 何をして遅い

(同日)

今日三時にお千代と花子に風呂にお這入りといふとお千代は隣りまで歸つて来て用意が出來たのに花子はまだはいらうとしてゐなかつた。

どんな虚言をいふか

一〇七 どんな虚言をいふか

(二月三十日)

昨日夕刻にお千代に今晚遊びに來られるかといふと判かりませんといふのを聞いてゐたから今晚お千代さんが來られますかといふとハイと答へた。今日夕食前に手を洗つたかといふとハイと答へた。うそだから洗ひなさいといふとブツブツ小言をいひく／＼洗つた。

太郎や次郎の摸倣

一〇八 太郎や次郎の摸倣

(二月三十一日)

今朝もちや箱を片附けて教室へ行かないからいけません一時間おけいこしてから片附けるのですといふと戸や障子の錠をおろしたから何でそんな事をするか

といふと風が這入るからだど甘くうそをいふた。是れは太郎や次郎の怒つた時の摸倣をしたのであるが風がはいるからとは花子の低能なる所以である。

一〇九 お千代と混浴

時々お千代と混浴をさせる今晚も同様混浴させたがよい氣になつて唱歌をうたひ遂にはジャラッキ仕方がない主婦が注意しても止めきれない笑ひ様をしてゐる。

一一〇 命令を如何に守るか

(二月一日)

午前九時前に袴をはきなさいと命ずると玩具を整理してゐる。ハイといつて何をいふのだといはぬばかりの顔してゐる。それから十五分間ばかりしてから行つて見るとまだ玩具を出したり入れたりして袴をはいてゐない。又いひつけるると今暫らくしてはきますといつて暫時すると便所に行つた。二十五分間の後に漸くはいた。

一一一 虚言の心理的解剖

(二月一日)

夕食の箸をはなすや否や隣りへ遊びに行かうといふからお千代さんはまだ御飯

お千代と混浴

命令を如何に守るか

虚言の心理的解剖

中だから寢床をこしらへておいてから行きなさいといふと最早大變足痛と腹痛だといつて七轉八倒せんばかりさも眞實らしき虚言。予も作病と出かけて七轉八倒の眞似をした。さうすると先生謙つきだ私しが門外へ出てゐる間にあちらへ行かれますといつた。是れにて花子の虚偽的行爲が意識的虚言であることがあきらかになつた。

一一二 盲目蛇におぢず

(同日)

今晚來客があつたので主婦が外出せねばならぬ花子も連れて出た。さうすると花子は何の懼るゝ所もなく主婦より先きへ何所までも出て行つた。園の所在地は古利のある所として大樹老木の鬱蒼として生へ繁り晝てさへ女子などには心さみしき所であるから闇夜には物すごい感がある位である。それを花子は何の恐る氣もない此の子が將來大きくなつて悪魔に誘はれたらどうなるだらう。

一一三 糠袋の洗濯

(二月八日)

今晚主婦が風呂桶の掃除をして見ると糠が澤山あるどうしたのかと思ふて見る

糠袋の洗濯

盲目蛇におぢず

と花子が風呂の上りに糠袋の洗濯をした事が判かった。

記憶と發音

一一四 記憶と發音

(三月九日)

片假名全部を諳記したらリルレの三文字を書き得なかつた。是れは發音の困難なるが大に原因であらう。さうして低能者は多くラ行がダ行になるものが多いやうである。

お千代と同衾

一一五 お千代と同衾

(二月十一日)

今晚お千代が泊めて下さいといつたので花子と同衾した。さうすると恰も親子のやうである。寝行儀の悪い事は話にならぬ。さうして又朝でもお千代は早くから起きて花子をゆり起す起きてからの掃除などもお千代は出来るが花子は出来かねる。

お千代の髪結び

一一六 お千代の髪結び

(同日)

此頃時々お千代が髪結びをしてやつてくれる。却々上手それて花子さんもお千代

お母さんへの手紙

一一七 お母さんへの手紙

(同日)

さんに結んで上げなさいといふとはいつて結ぶては上げたがお千代はジャマクサイといつて獨りて結んでゐた。

オサムウナリマシタ オトウサンモ オカアサンモ ゴキゲンヨロシイ デスカ オチヨサンヲツレテ カイツテモ ヨロシイデスカ

此の手紙はお千代と花子と共に書いたのであるが如何にお千代が花子のためになつてゐるか、明かになる。

お母さんにいふてやる

一一八 お母さんに云ふてやる

(二月十三日)

晝食の時に手を汚したから洗ひなさいといふてやるとイヤですといふたから主婦は水盤の側へ連れていつて手をひどくつけてやるとお姉さんも先生もお母さんにいふてやるはといつて暫時すると自分の室で放歌してゐる圖太い女だ。

天候が影響す

一一九 天候が影響す

(二月十四日)

家庭にて
進歩を認
める

今日降雨で昨夜から温く気分がよくない日であつた。花子は頭を叩いてゐた。

一一〇 家庭にて進歩を認める (二月十七日)

十四日に佛事があるからとて歸宅したが今日午後三時半に母親に連れられて歸園した。それで何か變つた事はないかと尋ねるとおかげさまで大さうおちついで大人らしくなりましたと。此の一言は予等が今日までの辛苦を慰藉するに足るのである。

大寒と體
温

一一一 大寒と體温 (二月二十日)

今朝は二十七度といふ寒さであつたから體温は如何と調べて見ると三十六度二分であつた。

一二二 都合の悪い時には何時でも病氣になる (二月二十一日)

都合の悪
い時には
何時でも
病氣にな
る

今日花子が隣りにいつたかと思ふてゐるのに自分の室にゐるから何せだと調べ

先生ばか
りに掃除
をさせて

て見るとお千代とお豊と遊んでゐたのでイヤで歸つてゐた。それで主婦は何せ遊ばせて貰はないかといふと熱が出ましてと平氣でいつてゐる其内にお千代とお豊が遊びに来ると最早我を忘れて遊んでゐた。

一二三 先生ばかりに掃除をさせて (二月二十二日)

昨年三十度の寒さに當てられて以來は花子の受持の庭を予が毎朝掃いてゐたが今朝は三十六度でまだ暖いといふ譯でもないが花子は何を感じたか先生ばかりに庭掃きをさしてすみませぬもう私が掃きますといつて箒を持つやうになつた。

一二四 誤りたる言語 (二月二十三日)

誤りたる
言語

- (1) いろ紙を イノ紙
- (2) よびに行くを ヨミニ行く
- (3) のろいを ノノイ
- (4) くらべを クラメ
- (5) ひかふを ムコト

本論 第四章 花子の教育日誌及び其特殊教育概要

(6) どうしたのを

シャッタ

以上は純然たる誤りもあるが56の如きは自分で好い加減にうたつたものである。

一事をす
れば他は
お留守

一二五 一事をすれば他事は留守になる (二月二十五日)

此頃庭の掃除をしてくれるやうになつたからよろこんでゐると室の掃除はしてくれない。一事が出来れば他事は出来ない。

骨まで喰
へ

一二六 骨まで喰へ

(同日)

今日晝食の時に魚の肉がまだ澤山残つてゐたので花子さんまだおいし所が澤山残つてますよお食べなさいといふと骨まで喰へといふといつて大に怒つた。

赤飯なら
ば汁一杯

一二三 赤飯ならば汁一杯

(三月一日)

毎月一日には一日といふ事を知らすために赤飯にしてゐる。さうして今日は豆腐汁の副食であつたが何日でもお汁となると御飯一碗に汁三碗といふ風であつたが

間違つた
唱歌

一二八 間違つた唱歌

(三月三日)

コレハネヅギ ネヅギツタ アンマレウサギウサギサン
ナサケニツキクル イモトサル 一モン モラウテ オトモスル イサイノ
イエヲ デカケタリ

一二九 髪をきれいにした

(三月四日)

今朝何時にない髪をきれいにしたから色紙を賞與した。

一三〇 着物を着かへるに三十分

(三月九日)

毎朝寝衣を着かへるに長い時間を要するから計つて見ると三十分はかゝつてゐる。

着物を着
かへるに
三十分

髪をきれ
いにした

借りて返す事を知らぬ

一三一 物を借りても返す事をしらぬ

(三月十日)

此頃はいろ／＼の物を借りに来るが返す事は知らぬ。

讀本第二卷に移つた

一三二 讀本第二卷に移つた

(三月十四日)

入園以來殆んど一箇年になつたが漸く尋常小學讀本の一巻だけを修了し得た。

好んで虚言をいふ

一三三 好んで虚言をいふ

(三月十六日)

今朝主婦が早く齒をみがきなさいといふと揚子を失つたといふからよく調べて見ると庭に落ちてゐるさうするとア、私揚子を捨てたといつてゐた。

一三四 體罰の下に唱歌をうたう

(三月十七日)

體罰の下に唱歌をうたう

今日寒いといつたから羽織をきなさいといふとイヤ最早仕舞つてあるといつて着ないのみならず悪口をいふ故に思はず體罰を與へたさうすると唱歌をうたつてゐた。

七轉八倒して病を訴ふ

一三五 七轉八倒して病を訴ふ

(三月十九日)

今朝は三十三度といふ寒さ朝起きるのが少しおそいさうして腹痛がするといつたから蒲團を引きめくると七轉八倒して腹痛を訴へたがまるきりの虚言であつたと見えて起床の後は何事もない但し寒さのために多少の錯覺を起したかも知れん。

一三六 何でも反對に出る

(三月二十一日)

何でも反對に出る

箸で△を作つて此の通りにせよといつたのに□を反對に作つた。目にまで逆にするつと見える。

一三七 花子に似合はぬ虚言

(三月二十五日)

花子に似合はぬ虚言

今日餘りよく遊ぶから寫真かけを編みなさいといふと糸がありません買つて下ださいといふからまだ買つて上げないでも有りますよ、能く探がして御覽といふとハイといつてありませんといふから主婦が探がして見ると澤山にある能く考へて見ると花子はさがしも何もしない雷編物するのがイヤだから其場のよい様にいふ。

其いひ方が如何にも眞實らしいので何時でもだまされる。

無理に諛
ないふ

一三八 無理に諛をいふ

(三月三十一日)

今日隣りへ行く勝手手の戸扉の釘が落ちて知れない主婦はよく知つてゐるから探がしなさいといふ、どうしても知れないので主婦がそこにありますかといふと今一本探がしてゐますといつた、無理にても諛をいふ。

園婢より
えらい

一三九 園婢よりえらい

(四月五日)

今日牛肉屋が肉を持參して來た時に花子が受取つて戸棚へ入れておいたらしい、そこで主婦が用達しに出て歸つて牛肉は來たかと園婢に尋ねると知りませんといふと花子は來ましたお婆、お婆、いふのにきませんから私が受取つて戸棚に入れておきましたと園婢よりもえらい。

十三參り

一四〇 十三參り

(四月十五日)

京都では十三參りといつて十三歳になれば四月の十三日に嵯峨の虚空藏といふ

お千代に
手毬を取
られた

のへ智慧を貰ひに行くといふ舊風があるが花子も十三になつたので八日に歸宅して十三參りをする事になつた。さうして十五日に歸園した母親の挨拶には澤山なお金を使つて十三參りなどした所て別に賢くもなれませんが(百圓を投じ)ほんとお家で御世話になるのこそ御たいいてはあります。

一四一 お千代に手毬を取られた

(四月二十四日)

今日は花子が毬をお千代に與へたらしいから主婦がお前そんなにお千代さんに上げてはよくないではありませんかお母さんに叱られますよと云ふと大に不機嫌であつた花子がお千代に種々なるものを口車に乗せられて取られてゐるのはこればかりではない。

一四二 諛の事實

(五月十九日)

今朝雪隠で時ならぬみぞれの音がしてゐたので主婦は花子さんお裏堅いですかといふと堅いですといふから諛でせう音がしてゐたではありませんかといふといふと堅いですといつた、此の時堅いか柔いかといふと或は柔いといつたかも知れな

虚言の事
實

いが何れにしても、誠は花子の天性である。

卦算で叩くぞ

一四三 卦算で叩くぞ

(六月一日)

今朝梅を盗食してゐたので主婦が注意しても黙つてゐるから予は手を摘んださうすると女にも似合はぬ卦算を振りかざして叩くぞといつた。

厭な日を一日働かす

一四四 厭な日を一日働かす

(六月十四日)

今朝は早く起きた唱歌も無理に練習した。それから頭痛がするといつて二時間目は厭ふたが可なりに練習させた三時間目は餘りイヤガッタから花子の室で授業してやつたそれから蒲團を出さして午睡をなささいといつておいて晝食せよといつた。さうして晝食の時に花子さんお蒲團を一度干しませうネといつて食後に蒲團を干さした斯うして終日寝かせずに働かした。

作病

一四五 作病

(六月十五日)

昨夜寢床に就くと呻なつてゐる。多分作病だらうと思ふと果してさうであつた。暫

昨日命じた事をす

一四六 昨日命じた事を今日する

(七月一日)

昨日の梅の樹で額を打つてゐたから手拭を水に浸して押さへなさいといふてやつたが昨日は餘り痛みもしなかつたか一向其様子がなかつたが今朝になつてから行つてゐた。

作業の進歩

一四七 作業の進歩

(七月二日)

此頃は大抵な作業は命ずれば出来るやうになつた。

死にたい

一四八 死にたい

(七月十四日)

夕食時にお千代が病氣だ誰も病氣だといふから花子さんも氣をつけなさいよ殊に水などを飲むと病氣になるといけませぬからといつてやると私水澤山飲んで死にたいといふからそんな事をいふからいけません何ぜそんな事をいふかといふとお母さんが死だらよるこばれると繼母の事なら或は然らんされど母親は母親で他所の繼母は子を苛めますが私は子のために苛められますといつた。

一四九 學科の進歩

(七月十七日)

學科の進歩

算術科

◎算術科

- (1) 一から五十まで數へよ
- (2) 〇五十を書け
- (3) 十と十で何程か
- (4) 五錢銅貨三個で何程か
- (5) 五錢で二錢の筆一本買へば残り何程か
- (6) 蜜柑六個を三人に分くれば幾個づゝか

國語科

◎國語科

(7) 紙十枚を二人に分くれば何枚か
 以上は花子の皆答し得た問題である

讀方

(イ)(ロ)

發音 五十音 濁音 半濁音
 ワタクシハ シラカワガクエンニキマシテカラ ホンガヨメルヤウニナ
 リマシタ。

書取

ナツヤスミニナリマシタ。
 シラカワガクエンニ ニワトリガキマス。
 ヨシダ山ニ 大キナ木ガアリマス。

以上よく讀みよく書き得た。

○習字

(七月二十九日書)

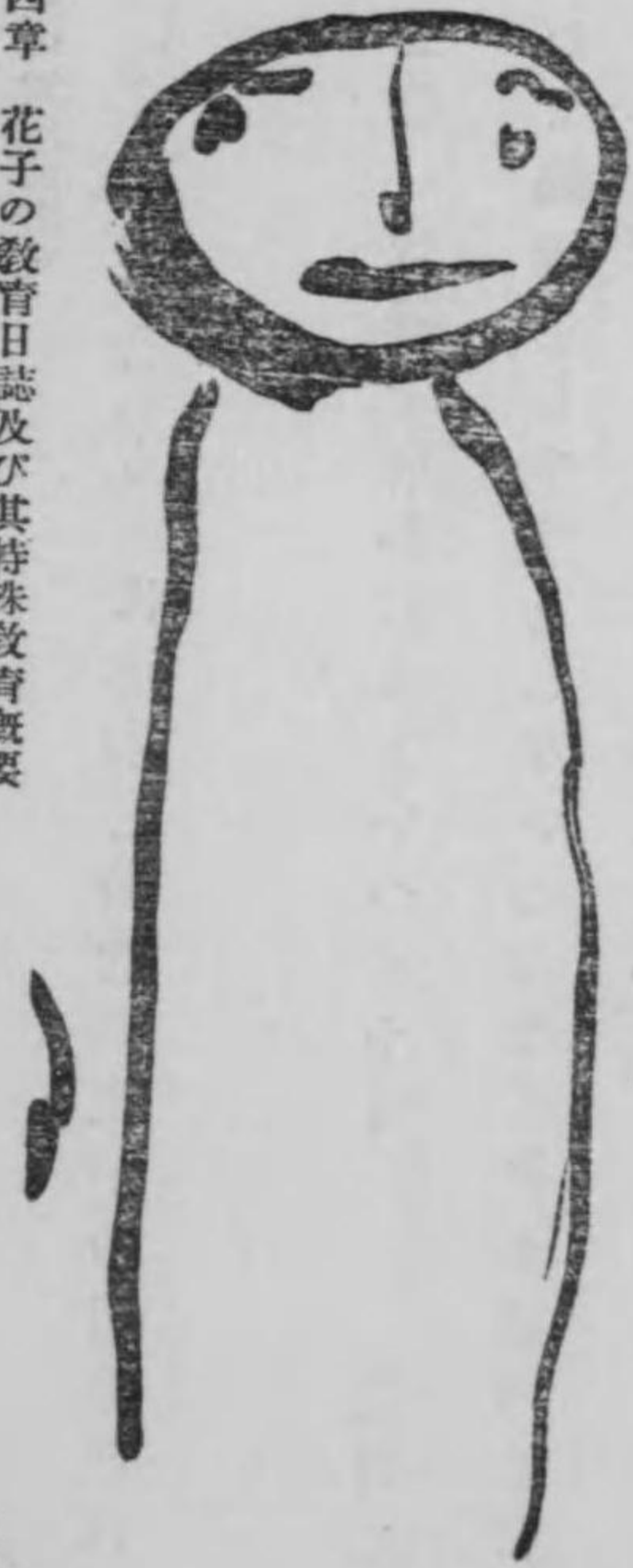


○圖畫

(自由畫七月二十二日書)



本論 第四章 花子の教育日誌及び其特殊教育概要



以上の如くにして裁縫なども大に進歩し唱歌は花子の得意なれば是れ亦相當に進歩した。

一五〇 裁縫を解かれるといつて小言 (七月二十一日)

今朝も遊んでゐて裁縫をしやうとしないのみならず主婦の甘言に乗じてお姉さんが解かはる私がきれいに縫ふてゐるのといふ。

一五一 歸宅 (七月二十二日)

今日母親が向ひに来て歸つた誰にも挨拶もしないで歸つて仕舞つた何と思つたのか知らん。

乙 十六箇月間に觀察したる花子の惡癖

花子が入園以來は授業日数が三百三十三日であつたが是れに對する出席日数は三百十八日であるから授業日數に對する出席日數の歩合を出して見ると出席歩合が九割六歩で缺席が四歩であるから先づ寄宿してゐるものゝ出席日數としては普通と見てよい併し此の間に花子については如何なる觀察をなし得たかといふ事は

歸宅

花子の惡癖

日誌にて略瞭かになる譯であるが予は花子については人間の價値の餘り有りがたくないのに想到した。さうして花子のやうな人間が現今の大人中に何程ゐるかといふ事を考へて見ると數を以てあげる事は出来ないが随分澤山ゐると思ふ而して普通の人がかゝる點に氣づかないでゐるものも随分澤山であると思ふ。然らば花子の觀察について如何なる判斷を下したらよいかといふと一種の劣等民族なる野蠻人であると思ふ。云へば適評ではないかも知れぬが當らずといへども遠からずであらうと思ふ。其理由は花子は人間の最も下等なものに專有なる虚言惡口罵倒が最大の特長であつて又一面には食慾睡眠小便秘性慾上の早熟等を有してゐる等を總合して見ると文明の子や文明國の女兒とは思へない固より教育治療學上よりいへば一種の病人ではあらうが單に病人として取扱ふべき兒童でない。故に予は一種の劣等人で一の遊民と見たらよからうと思ふ。

丙 十六箇月間に實行したる花子の特殊教育概要

(一) 養護

花子に特殊教育を施す事は餘程困難な事であつた。母親が最初當園に連れて來た

時には此の子がお内に一週間もゐますか知れませんがといふ挨拶であつたが入園後困難した事は日誌に記入してある通りである。さうして花子の特殊教育といつても別に太郎や次郎と比較すると餘程の差違はあつたのであるが養護については左の三項について一通り記入しおく必要はあらうと思ふ。

食物

(イ) 食物

食物については別に性質の善悪を區別するの能力はなかつたが管喰はせておけば何程でも食べるといふのが花子の特徴であつた。さうして花子は女だから多少の作法も守らせねばならぬといふ考へて太郎や次郎とは手加減を違へて見たが教へても却々に守らないさうして當園では兒童が少ないから皆同時に箸を取る事にしてゐたが容易に作法などは出來ないのみならず花子は下等な事を摸倣する事が上手で嘗て主婦が蛤の貝を故意に食卓の上に出して見たが花子も其通りにした事があつたやうに吾々は兒童の食事を衛生的訓練のならしめんために犠牲になつた事は甚くなかつた。それで管花子に是れが悪いと思へば誰もが口にしなかつたのである。

運動

(ロ) 運動

花子は跛といふ程でもないが少し變はつた歩るさやうをする。さうして頭が小さい胴から臀部へかけて太つてゐる。歩るくには此の上ない不便に出來てゐる。それ動かずに食ふ事や遊ぶ事を考へるのは随分抜け目がなかつた。かういふ風であるから運動は花子の餘り好まない所であつたが只何處となしに遊び歩くのは花子の最も好む所であつた。故に當園では時々近傍の神社や田圃へ散歩をさせる事を主としたのであつた。普通小學校で行ふ如き體操は手足の運動を主として數分間位行ふたのであつた。其他自由運動としてはブランコなど随分好んで遊んだ。要するに花子の運動は遊戯が幼稚であるだけに極簡單なものであつた。さうして授業中の運動としては遊戯として豆袋投げ輪投げお小梅や毬の投げ合ひ等であつて又指先の練習運動としては彈豆等練習した。

(ハ) 睡眠

睡眠も花子の長所であつたが不規律な家庭にゐた花子は入園當時は就床時に於

いて不眠の状態であつたが當園に生活に慣れてからは九時間乃至十時間の睡眠時間て十分であつた併し天候の變生理的の不調和に當つては随分睡眠に耽けるの傾向はあつたが太郎や次郎の如くに剛情でなかつたので相當に睡眠時間を守らせ得た。所が時々家庭に返した時には何時でも寝てゐるといふ訴へてあつた。花子に取りては無理のない話である。

(二) 教授

現時初等教育界に低能兒教育なるもの大に唱導されて其方法等について種々研究調査が行はれてゐるやうであるが併し其兒童は如何なる程度にあるかといふやうな事が確定されてないやうである。それ若し低能兒といふものゝ純粹なるものがあるとするならば予は花子を以て低能兒の好模型としたいと思ふ。故に花子の教授法こそ低能兒教育に適用すべき方法であらうと信ずる。而して此の花子の教授法を大別すると實物教授具體的教授實際的教授とかう三大別する事が出來やうと思ふ。さうして此の三大別を低能兒教授法の骨子としたいと思ふ。花子は是れによつて教育可能の人となつたのである。故に左に此の三者の區別を概論しておこう。

教授

實物教授

(イ) 實物教授

實物教授といへば教育界に従事してゐる人の既に業に了解されてある所であつて一例をあげ見れば今茲にハといふ事の文字と發音を教ふるならば先づ最初に實物鳩を見せて鳩の音、名形性質等の話をなし。次にハトといふ發音を正し。次に文字の書方を教授するといふのである。是れはペスタロッチー以來教育界に稱へられた事であるが予が低能兒を教育するに當りて彼等が文字を記憶するに當りて如何にして教授せしものが最も深き印象を與へたかといへば此の實物教授が最も有効であつたやうに思ふ。次章に述べる所の梅子の記憶は全くそれであつた。トといふ字を書いて見やうといつた時に形の如くに鳥を回想して次にトの字を再現するといふやうな有様であつた。

(ロ) 具體的教授

具體的教授といふのは如何なる教科を教授するにしても必らず何かの形を以て教授するといふ事であつて二錢と三錢とて何程になるかといふやうな算術問題を

具體的教授

教授するときには必ず〇を以て錢の代はりとするか又は豆を以て錢の代はりとするかといふやうにして抽象的ならずして教授するものをいふので花子の教授は多く是れで教授可能の人となつたのである。

(ハ) 實際的教授

といふのは室の掃除をせねばならぬといふやうな事を教授する場合には必ず教師が雑巾を以て實際に教授したのである。故に實際的教授といふ事を一言にしていふならば實際界にある如くにして教授するといふのである。花子は是れによつて實際問題について多少の興味を感ずるやうになつたのである。以上の實物教授具體的教授實際的教授の三階段を経て低能兒は自然界や社會に接近し得るのである。

(三) 訓練

(イ) 實踐指導を主とせし事

花子を訓練するには教科書によつても出来なければ教訓によつても出来ない。當

實際的教授

實踐指導

實踐指導あるのみであつた。花子特徴の悪口をいふなといつた所で仕様がなないあほに附ける薬はないといふ諺も花子に於いて味ひ得た。花子に悪口をいはせまいと思へば側にゐるものが人を罵倒しないより良策はなかつた。太郎や次郎の矯癖についても花子の側では出来得るだけ話をしないやうにしたが彼の虚言や悪口は一種の天才であつて何處からあんな虚言が出るか悪口を吐くかと研究して見たが却々教訓や教科書の説明で矯正の出来る兒童ではない。當赤心予等が熱誠を以て彼を動すより道はなかつたのである。是れ第一に實踐指導を以て主とした所以であつた。

(ロ) 悪癖の表はれし時自然的の罰を示したる事

例へば食事の時に汁今一椀上げませうかといふと彼は欲しいにも拘はらずもういらぬ食べられないはといふやうな事がある。其時には他の兒童には二椀まで食べさせる事があつても花子には與へない。さうして後に人の親切でいふ時にはおとなしく子供らしくハイといはねばなりませんぞといつて聞かせた事であつた。

(ハ) 體罰を與へし事

花子の悪口罵倒になつて來ると如何な罵倒癖のある大人でも閉口させた。近所に有名なる罵倒癖の婦人ありて一日花子と何かの事で論争したと見えて其人一日主婦に告げて曰く花子さんの罵倒には如何も閉口しますネーと實に其通りで實踐指導のみでは及ばない爲めに臨機體罰を與へる必要を認め併し結果はどうであらうか疑問であるが悲しむべき事には體罰を與へた所で都合よければ其時のみの利益で都合悪しければ留度なき罵倒をなさしむるのみであつた。かゝる兒童に體罰は疑問であるが體罰を與へずにはゐられなかつた。さうして予が花子に體罰を與へたのは怒りを以てしたのではない是れ程にしてやるのに悪口をいひ罵倒する其上彼がいふがまゝにしておくのは決して慈悲ある方法と思はなかつたからである。

作業獎勵

(二) 作業を獎勵せし事

花子は暇さへあれば遊んでゐる隙さへあれば惰眠を貪つてゐる。さうして課業は何とかして抜けやうとしてゐる。當元氣な時は食時のみであつた。故に庭の掃除とか室の掃除などは自發的にした事は殆んどない位であつた。故に先づ花子の手に合ふ事から強制的にやらして見たが或時には雑巾を手に持たしてやると投げつける罵

特別保護

倒するさうして其後から花子さん御飯ですと呼ぶと第一着であつた。故に先づ食事の手傳をさすこそ花子で適當なれと思つて最初には食事の手傳をさせそれに慣れた頃には庭の掃除室の掃除をさせて見たが今日でも一人前の事は出來かねるが先づ命ずれば出來るやうになつただけえらと思ふ。

(ホ) 夜間特別保護を加へたる事

花子は以上述べた位幼稚であるのに異性との話になると驚くばかり早熟である。故に最初は退園させようかと思ふたが餘り多數でもないので特別注意を拂ふ事にして夜間の監督を一層嚴重にした譯であつたのが餘程職員の手が揃つてゐる所ならばイザ知らずさうでない以上は男女を合同に寄宿せしむるといふ事は低能兒教育所にては危険と執務者の精神的苦痛を與ふるのみであるから女子は收容しないがよいと思ふた。要するに何れの子供も同様であるが殊に花子の如きに至りては議論や理屈によつて十分な教育が出來やうと思はれない。随つて秃筆な予には記述し得ない事項が多々あるのである。又記述する事を好まないのである。

丁 花子の變化

(一) 生理的變化

(イ) 皮膚がきれいになつた

花子が入園した當時は全身の皮膚が松の木の皮のやうであつたが一箇年餘教育した今日に於ては一體に於いて綺麗になつた是は園醫の語る所である。

(ロ) 寢小便が止んだ

入園當時から冬にかけて時々寢小便のために困らせた事は日誌にも記入してあるやうであるが殆んど全治してゐたが夏季に向つて水を盗飲した爲め一回失錯したのみで今日は全治した。

(ハ) 遊戯中の失便が少なくなつた

花子は寢小便ばかりでない少し遊び過ぎる時はよく小便の失錯をしては着物を

皮膚がきれいになつた

寢小便が止んだ

ぬらしたが是れば全治した今日から考へて見ると養護の行き行届くのと教育の結果意志が強固になつたからであらう。

(二) 睡眠が適度になつた

花子が入園當時は就床後一時間位は安眠しなかつた當園の生活に慣れると同時によく睡眠するやうになつたさうして起床でも六時よりおくれた事はなかつた。

(ホ) 疲労の度が少なくなつた

花子は疲労の度が甚だ少なくなつた但し花子の疲労は生理的であつたか心理的であつたかといふ事を調べて見ると心理的に甚だしかつたやうに思ふが兎に角疲労の度が少なくなつた。

(二) 心理的變化

(イ) 感覺

花子の感覺は概して遅鈍であつたが就中聽覺が最も鋭敏で視覺は弱度の近眼で

睡眠が適度になつた

感覺

味覺や皮膚覺は可なりに發達してゐた。さうして特に注意を拂ふ事は觸覺の鋭敏で異性のものが少し手に觸れても氣の浮き立つ事であつた。又花子には時々錯覺を起す事もありはしないかと思ふ事もあつたが要するに普通ではなかつた。故に味覺については食事の時に皮膚覺については指皮の練習又は入浴時に冷温の感覺等について注意を拂ふたが何れの感覺も正常に進みつゝある事を發見し得た。

記憶

(ロ) 記憶

花子の記憶は知的でなくて情的であつた。又視覺タイプでなくて聽覺タイプの方であつた故に長所を利用して記憶させたが先づ國語についていふならば教授して行くだけの文學の讀方や書方は記憶した。

注意

(ハ) 注意

以上の如くて花子の注意は理屈よりも情に訴へてやる方がよく注意した。目より入れるよりも耳に聞かす方がよく注意した。さうして花子には注意活動が遅いのであつて大に微弱といふのではなくて自分の氣に向つた事であるならば相當注意を

判断

(ニ) 判断

拂つたのである。故に指導者の手心によつてどうでもなるやうになつた。

はどうであるかといへば感情に於ける憎悪自分の勝手に對する事ならば相當に判断し得たが智識上の判断は甚だ劣等であつて二錢貨一個と一錢一個で何程といへば二錢といふ如き状態であつたが判断力の進歩は日誌最後の算術問題によつて多少の進歩をしてゐるといふ事が瞭かになるであらうと思ふ。

(ホ) 感情

感情はどうかといへば下等な動物的感情に於いては相當に發展しゐた。高等なる殊に道德的感情に於いては零であつたが流石は人の子であるから或る點まで進歩させて行く事の見込みは立てる事が出来た。

(ヘ) 意志

意志も感情と同様に衝動的であつて下等な遊戯食慾といふやうな事に強固であ

本能

つて是等の慾望の満されない時には怒る位な事で文字を覺えるとか作業をしようと
かいふ事になると甚だ薄弱であつたが教育した結果は決して無効ではなかつた。

(ト) 本能

本能は眞に動物的なる本能が盛に表はれるのみであつたが多少人として向上し
つゝある事は以上に述べた通りである。

(三) 教育的變化

(イ) 學科の成績に表はれたる進歩

花子が學科の成績に表はれたる進歩については花子の入園當時の状態と比較し
て見れば判かる事であるが花子が入園當時に出來た事は間違ひ多い唱歌と裁縫の
初歩位であつて文字の記憶數の觀念等は零といつてもよい位であつたが最後の試
験問題について進歩の度を推察すれば明かになるのである。

學科の成
績に表は
れたる進
歩

操行に表
はれたる
變化

(ロ) 操行に表はれたる變化

前にも記入したやうに花子は一週間と他所にゐた事がない嘗て父親の病氣に當
り家内の一同が守しかねたので他家へ預けたが三日間より居なかつたといふ位な
ので一箇年以上も當園にゐる事が出來たのであるから操行上に大なる變化の表は
れたのは當然であらうと思ふ。

其表はれたのは

第一には應答である。花子に用事でもあつて名を呼ぶと返事をしないか小言をい
ふか不平を鳴らすかであつて直ちにハイと返事をした事のなかつたのは入園當時
の状況であつたが今日では餘程加減の悪い時でなければ返事をしなかつたり小言
をいふやうな事はないやうになつた。

第二には虚言悪口等の悪癖發現が少なくなつた。前にも記入したやうに花子の虚
言や悪口は一種の天才であつたのであるが當園では種々なる方法を以て悪癖なる
事を自覺させた。故に多少減退するやうに思はれた。

第三には家事の手傳や作業に従事する事が出来るやうになつた。

第四には作法が少しは判かるやうになつた。
 第五には性慾上の早熟行爲が殆んど跡を絶つた。
 第六には學科に多少の興味を持つやうになつた。
 以上の如くであるから在園日數に相當したる成績は表はれたるものと見てよからうと思ふ。

戊 花子の教育法より得たる遅鈍兒教育法

(一) 家庭にての養育法

(イ) 養護の注意

遅鈍兒の多くは動物的であつて睡眠食慾遊戯等に多大の慾望を以てゐるから父母たるものは十分の注意を拂はねばならぬ。餘り兒童教育に考へのない人は彼等に満足と與へさすのを以て此の上ないよろこびとして管喰はせたり眠らせたり遊ばせたりして文字を教へるとか道徳を指導するとかいふ事には一向注意を拂はない

ものがある。花子の親の如きも其本人が學校へ行く事を好まないのて遂に以上の如き動物的本能の満足とさせるの弊に陥つたものであるから若し世に花子の如きものがあるならば餘り食ふ事や遊ぶ事や眠る事にのみ十分の満足と與へさせないで適度の節制とさせる事は兒童を人にさせるの本であるから此の邊の注意を怠らないやうにする事が必要である。

(ロ) 家族の修養

花子について實驗した事は家族の修養の足りない事である。故に普通の子供の居る所でも親たるものは修養といふ事については一日も忘れてはならぬ事である。斯る遅鈍兒のある家庭では一層修養する必要があると思ふ。其理由は花子の虚言や悪口は一は兩親の修養の足らない事も事實である。大體我國一般に兒童のために親が修養するなどといふ事は夢想にだもしないだらうと思ふ。併しながら昔の諺に負ふた子に教へられて淺瀬を渡るといふ事があるが是れは確かに子を手本に子を教師に修養せよといふ事であらうと思ふ。故にかゝる子供のある内であつたならば親自身が修養しなければ子を人にする事は不可能であらうと信ずる何せなればか

かる兒童は非常な摸倣力に富んでゐて而かも其摸倣した行爲が容易には去らないといふ事になるのである。此の意味に於いて當園でも太郎や次郎のために多少の惡化を受けた事は事實である。それで若し理想的の教育をいふならば花子の如きは花子位な兒童と女子の附添一人を附けて太郎や次郎を分離した所で教育したならば大に面目を改める事が多いだらうと思ふ。

醫師の診断

(八) 醫師の診断

馬鹿につける薬はないと昔からいふけれども醫術の進歩は却々なもので彼の鼻腔閉塞腺の増殖などは馬鹿の原因をなす一つであるからかかる病氣はありはしないかと醫師の診断をうける事は必要な事である。

社會に於ける注意

(二) 社會に於ける注意

如何に子供の教育法を知らぬ親でも我が子が馬鹿になるやうに不具者になるやうにと願ふものはなからうどうか善い事を見習ふやうと希ふてあらうけれども門口を出づれば社會の風は無慈悲なもので何時の間にもやら下らぬ歌を覺え見にくき

眞似をするに至るものである。さうして花子の如き女兒になると近所界限の玩弄物となるものであるから親たるものは注意の上に注意を拂ふ事が肝要である。若しも黙まつて外出するやうな事があれば誰か後を追ふて何處で遊んでゐるか位は見届けねばならぬ。又夕刻になりても歸らぬやうな事があれば捨て、おいてはならぬ。出來得るならば特殊教育所へ入れるかそれが出來なければ自由に外出さす事だけは嚴禁してもよからうと思ふ。其代はりには家事の繰合せをつけて父とか母とかが時時散歩してやる事、下女下男でも餘程事理を解したものでなければ附添ふ事は慎まねばならぬと思ふ。此の點に於いては予は園婢の適當な者のないのに常に困つた次第であつた。

(二) 學校にての特別扱ひ

教師の忍耐及び親切

(一) 教師の忍耐及び親切

花子の如き兒童のあつた時學校にては如何に取扱ふべきかであるが是れは現今の小學校では問題外であつて放任してゐてもよからう。さりながら若し篤志なる

教育家があつて忍耐と親切とを以て當つたならば相當の効果を見る事は出來やうと信ずる。

家庭との連絡

(ロ) 家庭との連絡

さうして其目的を達するには家庭との連絡を取る事が必要であらうと思ふ。其理由はかゝる兒童の多くは養護に於いて教化性を妨害されてゐるからである。故に家庭の養護を教育的にしたならば必ず教育の乗すべき道を見出す事が出來やうと信ずる。

第五章 梅子の教育日誌及び其教育法の概要

甲 梅子の教育日誌

一 入園前の梅子

入園前の梅子

梅子は學園附近の女兒で小學校に通ふ事三箇年其間殆んど精神病者の如き状態にて教師及び他兒に少からぬ迷惑をかけたるものにて教育不可能と認められたるものであつた。

二 入園

(四十二年十一月一日)

本日入園した其年齢は十歳豆人形の選り別をして見たが甚だ不味かつた。數については一より十まで數へたが時に五つ七つ四つなどいつた。又名を書いて見やうといふとイロハニホと不完全に書いて自分の名の如く讀んで得意顔をしてゐた。

診断

三 醫科大學にての診断

(十一月十四日)

梅子が入園する前に醫科大學の精神病科にて診断を受けしめたが先天性精神發育制止といふ事であつたから又同耳鼻咽喉科について診断を受けさせたが腺増殖との事で手術をして貰つた。

發音

四 色の觀念と發音

(十一月五日)

赤桃茶等の名を口にしたが實際は赤のみを知つてゐた。發音についてはサ行が甚だ不完全であつた。

八の字の記憶

五 八の字の記憶

(十一月十一日)

梅子が文字を書くには文字であらうかと思ふやうなものが書けたが讀む事が出来ない。八の字を教授する事今日で五回目であるが漸くに書く事も讀む事も出来るやうになつた。

積木と手工

六 積木と手工

(十一月二十日)

此頃積木を用ひて五以下の分解綜合を試みてゐたが五以下に於いては正確に出来るやうになつた。手工に於いて色紙を與へたが其表裏が判からん。

清書の始め

七 清書の始め

(十一月二十二日)

今日始めて清書させた。

算術の進歩

八 算術の進歩

(十一月二十七日)

今日始めて數の分解綜合が出来るやうになつた。

九 病氣欠席

(十二月二日)

本日より年末まで胃腸病のため欠席した。梅子は通學のため十分の養護の出来ない結果である。

記憶の試験

一〇 記憶の試験

(四十三年一月八日)

久しく休園したから文字の記憶を試みたがシシクシ・ハト・マリなど書いて讀めなかつた。

選擇作用

一一 選擇作用

(二月二十六日)

本日片假名の文字選りをさして見たが既習文字として十字を選びたるも讀み得たるはイトハ等に過ぎなかつた。

唱歌の進歩

一二 唱歌の進歩

(二月二十八日)

今日雪達摩の唱歌が上手にうたへた。

數へ方の進歩

一三 數へ方の進歩

(二月七日)

算術に於いて十までの數へ方が正確に出来るやうになつた。但し9と10と何れが多いかといふやうな判断が出来ない。

獨言

一四 獨言

(二月十四日)

午前中は隙があると獨言を云つてゐた。さうして午後になると疲勞して教授が困難であつた。

數字の記憶

一五 數字の記憶

(二月二十四日)

一二三四五六と書いて順には讀み得たが逆に讀まして見ると六七八と讀みて二一に至りて二一と讀だ。

天候の變調

一六 天候の變調

(二月二十六日)

本日は五十度の高温で雨さへ降りしきりいとも陰氣な日であつたが成績がよくなかつた。

形が書けぬ

一七 形が書けぬ

(三月三日)

今日竹箸にて六角を作らしめたるに出来なかつた。但し三角はよく出来た。

鳥の足や
犬の足の
数が判か
らん

一八 鳥の足や犬の足の数が判からん

(三月四日)

今日算術の時に鳥の足や犬の足が幾本あるか尋ねて見たが判からん。故に實物を示して見たが犬が餘り活動して十分に觀察せしむる事が出来なかつたのでよく了解しなかつたらしい。

觀念の聯
合

一九 觀念の聯合

(三月五日)

オの同音ある名詞を考へさして見たが一つも出来なかつた。さうして實物羽織を示して書かせて見るとハオリと讀んだ。實物の印象と文字の印象が混同したからだ。

既習文字
の書取

二〇 既習文字の書取

(三月十五日)

今日既習文字の書取をさして見たが左の二十一文字を書き得た。

ア	イ	ウ	○	オ
カ	○	ク	○	コ
ナ	シ	○	セ	○

名詞の綴
り初め

二一 名詞の綴り初め

(四月八日)

今日字カルタを興へて名詞を綴らして見たが
イト、グツ、マメ、ウシ、タナ
と綴り得た。

ケの字の
摸倣

二二 ケの字の摸倣

(四月十一日)

今日ケの字を教へると第一回目にはノトと書き、第二回目には一ノノの如き下筆の順序を以て書き、第三回目に漸く正しく書けた。

手工の進
歩

二三 手工の進歩

(四月十二日)

梅子には何等の手工も出来なかつたが此頃縫取りや豆細工が上手に出来るやうになつた。

運動能力

二四 運動能力

(四月十九日)

今茲に具體的に記述する程の進歩はないが歩調手工遊戯等に於いて運動能力の大に進歩した事を認め得る。

金錢の觀念

二五 金錢の觀念

(五月七日)

金錢について教授を始めて見たが壹錢銅貨と貳錢銅貨との區別が判からん又壹錢銅貨を計へるのも壹錢貳錢參錢五錢と數へた。

梅の實を取る

二六 梅の實を取る

(五月十日)

今日梅樹の下に遊んでゐたが何知らぬ顔して實を取つてゐた。

お小梅投げの進歩

二七 お小梅投げの進歩

(五月十六日)

梅子に運動能力の發達や注意養成の一方法として亞鉛製の洗面器の中へお小梅投げをさしたが最初には投げ入れやうとする意志と注意さへもなかつたが此頃は多く投げ入れる事が出来るやうになつた。

惡戯

二八 惡戯

(五月二十日)

今日晝食前に太郎とけしからん惡戯をしかけてゐた太郎がいふには梅子が相手になつたからだといつたが梅子にはありさうな事で油斷がならん。

人らしくなつた

二九 人らしくなつた

(五月二十六日)

梅子は恰も狂者の如く通園の往復にも無意味の事をしやべる教室にあつても絶えず獨言をいつてゐたが此頃になつて是等の言行が大に減じて來た。

注意の進歩

三〇 注意の進歩

(六月七日)

元良博士創見の注意練心機について時々練習したが最初は殆んど無感覺といふ風であつたが大に進歩した。

文字の記憶

三一 文字の記憶

(六月二十四日)

今日知つてゐる字を書いて見やうといふと
 カシ マメ イト ハト ハリ スモモ モモ ノリ アテ ナコ クサ
 ヒト 一二三四五六
 と書いた。

三二 自然物について數へるやうになつた (七月十二日)

此頃は何所にいつても草木石等について此れは幾つ彼は幾つといふやうに數へるやうになつた。

三三 感情の試験 (七月十八日)

今日左の問ひについて試験して見た。

- (1) 何が一番すきか 先生。
 何故 何故デモ。

自然物についで數へるやうになつた

感情の試験

算術の進歩

三四 算術の進歩

(七月二十一日)

本日左の問題を即答し得た。

- (2) 何が一番いやか 太郎サン。
 何故 悪イコトスルデ。
 (3) 誰が一番こわいか 先生。
 何故 横着スルト叱ラレルデ。
 (4) 何がうれしかつたか ワカラン。
 (5) 何が悲しかつたか ワカラン。
 (6) 誰がすきですか 花子サン。
 (7) 誰がいやですか 太郎サン。
 (8) 何して遊ぶのが好きですか オトナシクシテ居ル事。
 (9) 何するのがいやですか 横着スルコト。
 (10) 學科は何がすきか 算術。

- (1) オ父サンヨリ桃三箇オ母サンヨリ桃二個賞ヒタリ合セテ何程

本論 第五章 梅子の教育日誌及び其教育法の概要

- (2) 其中一個食へば残り何程
- (3) 残りヲ二人ニ分クレバ何程宛カ
- (4) 一ヨリ七マデノ數字ヲ書ケ
- (5) 其上ニ〇ヲ書ケ

記憶し難
き文字

三五 記憶し難き文字

(七月二十三日)

今月五十音を書かして見ると左の文字を書き得なかつた。

エケ ソ ヌ フ ム メ ユ ヨ レ ロ

金銭の價
を知らぬ

三六 金銭の價を知らぬ

(九月十六日)

今日は壹錢から拾錢までの數へ方は出來たが貳錢壹個と壹錢二個と何れが多いかといへば壹錢銅貨二個の方が多しといつた。是れは問ひ方にもよつたのであるが金銭の價がまだ判からん。

物忘れを
しないやうになつた

三七 物忘れをしないやうになつた

(九月十七日)

うになつ
た

特別研究

是れまでは紙を持參せよといつても忘れる。筆を買つて貰へといつても忘れる。お父さんに來て貰へといつてもよく忘れたが此頃は餘り忘れないやうになつた。

三八 特別研究

(十月六日)

梅子は園の近くより通つてゐるので睡眠状態、食事、振疲勞、遊戯、摸倣、言語、便通等の研究を目的を一週間寄宿させる事にした。午後六時に母親が梅子を連れて來た。母親は内裏の不始末をかこつてゐた夕刻は裁縫を習ふといつて主婦につき纏ふて來た。就床してからは熟睡しない傾向があつた。

家庭の小
言

三九 家庭の小言

(十月七日)

朝起きは普通であつたが三回の食事を終はつて家庭の粗食を訴へた。但し授業には別に大なる變化も見なかつた。

學校の子
になりた
い

四〇 學校の子になりたい

(十月八日)

昨夜はよく睡眠した。晝食の時松茸飯を四碗食べた。さうして曰く一生學校の子に

無鐵砲な事をす

なりたいたといつた。何ぜだと云ふと御馳走があるからといつた。予は梅子への同情が禁じられなかつた。さうして今日は學科にまて影響して算術などもよく出來た。

四一 無鐵砲な事をす

(十月九日)

今日次郎が鉛筆を削づつてゐると後から相手になつて指に負傷させた。無鐵砲な事をする。さうして白川學園では何も呉れぬでイヤだと小言をいつた。是れは家庭では規律なく與へるのだが本園では午後一回より與へないから無鈍着にいふのらしい。尙何をしてしても依頼心があつて出來る事をしない傾向がある。

四二 體温

(十月十日)

今日體温を取つて見ると左の通りであつた。

午前八時 三十六度二分

正午 同

午後七時 三十六度七分

體温

觀察終了

四三 觀察終了

(十月十三日)

今日で寄宿さしてから九日になるが

- (1) 神經過敏
- (2) 時に興奮状態あり
- (3) 營養不良
- (4) 食事にびろつく
- (5) 注意散漫
- (6) 無頓着
- (7) 依頼心
- (8) 盜癖

等の缺點について觀察し得た。

四四 五錢の白銅貨

(十月十五日)

今日筆術の教授に於いて五錢白銅貨を見せると六錢といひ。又五錢二個で幾錢と

五錢の白銅貨

發音

いへば參錢など云つたのには大に閉口した。

四五 發音

(十月十九日)

梅子の發音の悪い事は當然であるが今日もアワセをアブハセといふたのは著しく耳立つた。

四六 辨當を食べない

(十月二十日)

此頃は時々辨當を食べない事がある、よく注意して見ると梅子には食べられない。故にかゝる時には當園で與へる事にした。

四七 銅貨の價值が瞭かになつた

(十月二十五日)

銅貨の價值が明かになつたが貳錢一個と壹錢三個とを置いて其上に壹錢一個増して行くと貳錢參錢四錢五錢六錢といつた、普通兒ならば直ちに六錢といふ所である。

銅貨の價值が瞭かになつた

辨當を食べない

手工の進歩

四八 手工の進歩

(十一月十日)

折紙細工が出来るやうになつた。

四九 缺席

(十一月十九日)

四日ばかり缺席してゐるので主婦が様子を聞きに行く、と學校へ行くのがイヤだと云ひますからと云つてゐたさうだが身體にも衰弱の徴候を認めてゐる、又そればかりでない、附添の妾浮世話も出たと。

五〇 編物の端緒が開けた

(十一月二十二日)

今日始めて毛糸の三つ編みが出来た。

五一 學校が嫌ひになつた

(十一月二十九日)

又五日間缺席して今日出席したが教室では欠伸ばばかりしてゐる。さうして誰が別に悪い事をするといふ譯でもないが昨年十二月には一ヶ月休業したので生理的

編物

學校が嫌ひになつた

に變調を來すのであらう。

五二 入浴

(十二月九日)

次郎が四國順禮の御利益で足痛が今に全癒しないから茲一週間程藥湯を始めたので梅子にも入浴させたが却々に好結果を見たやうに思ふ。

五三 算術の進歩

(十二月十日)

今日以下の問題を正答し得た。

- (1) 一より二十までの記數法
- (2) 三十の〇を記せ
- (3) 五つの蜜柑の中三つ食へば残り
- (4) 五錢貨一個と壹錢貨一個とて何程
- (5) 五つの柿と三つの柿とて何程
- (6) 壹錢と貳錢とて何程
- (7) 紙二枚と三枚とて何程

五四 讀方と書方の進歩

(十二月十三日)

左の書方と讀方が出來た。

ハタ カサ ツル シカ ハサミ クモ ミカン タケ フネ
 (以上書方)
 キク スズメ ヒバチ サルト カニ ハサミトモノサシ ナシト ミカン
 (以上讀方)

五五 五十音全部の諳記

(二月十七日)

今日五十音を朗讀して書かして見たが全部を書き得た。大なる進歩である。算術も却々に進んだ。

五六 五十まで數へ得た

(二月二十一日)

五十までの數がよく出來た。

編物に一心になる

五七 編物に一心になる

(三月二日)

此頃編物に興味を有し朝早ふから来て一心になつてゐた。

附添の不注意

五八 附添の不注意

(四月五日)

今日は四十五度の寒さで雨さへ降つて來たのに羽織も着せず足袋もはかさずして登園さした。

去年の祭りと今年の祭り

五九 去年の祭りと今年の祭り

(五月十二日)

今日は梅子の里の神祭である。去年は園婢に云つて曰くお婆歸つて芋の皮むきをするといつたが今年はお婆早く歸つてお母さんの手傳するといつた。是れは大なる進歩具體的より抽象的に進んだのだ。

話の始め

六〇 話の始め

(五月二十日)

梅子は無意義な話をよくするが纏つた連続した話の出來た事がなかつたが今日

筆の持方

六一 筆の持方

(六月二十一日)

始めてヨクバリ犬の話が出來た。梅子の習字する時には必ず筆を持つて一回は練習してやつたが何時でも思ふやうに行かぬので筆を持つてやつたが大に成功した。

境遇の影響

六二 境遇の影響

(六月二十三日)

茲數日間妾の内より實家に歸つてゐる。猥褻なる事をいふし心調が亂れる恰も當園に寄宿した時程の差がある。

六三 學科の進歩

(七月十九日)

學科の進歩

◎算術

- (1) 一より百まで數へよ
- (2) 〇五十を書け

- (3) 十と十で何程
- (4) 五錢銅三個で何程



(七月二十一日書圖書は自由書にて男兒)

- (5) 五錢で貳錢の筆一本買へば残り何程
- (6) 蜜柑六個を三人に分くれば幾個づゝか
- (7) 紙十枚を二人に分くれば何程か

以上は梅子の皆答し得たる算術問題で國語科の讀方綴方は花子も同様に書方圖書は前掲の通りである。

乙 一箇年九箇月間に觀察し得たる

梅子の精神状態

一箇年九箇月間の在園になつてゐるが梅子が入園してから此の日記の終はりまでは授業日数が四百六十一日で出席日数が四百十三日であるから此の歩合を出して見ると出席が八割九歩で缺席が一割一歩である。さて此の間に梅子については如何なる觀察を爲し得たかといへば予の所謂精神異常性のもので教育治療學者に云はすれば精神薄弱兒といふ模型であらうと思ふ。さりながら女兒は通學であつたがために成績の上がる事もおそく随つて教育日誌も多く教授事項に止まつたのは自然の結果であつて訓練方面について十分の觀察を爲し得なかつたのは大に遺憾と

梅子の精神状態

する所である。

丙 一年九箇月間に實行したる梅子

の特殊教育概要

(I) 養護

(イ) 特別研究

特別研究

梅子を特別に研究したのは日誌にある如く一週間ばかり臨時寄宿せしめて研究した事である。大體かゝる兒童の教育は通學にては大なる効果を擧げ得られるものではない。併し止むを得ず通學せしめねばならぬ時は家庭が如何なる養護をなすつあるかといふ事は根本的に研究せねばならぬ問題である。是れは時により機に臨みて寄宿せしめ養護上の研究をなし保護者に親切なる警告を與へる事は必要であらうと思ふ。

辨當

(ロ) 辨當

辨當の事は普通の小學校でも十分研究されてゐるやうであるが斯の種の兒童については特別に注意を拂ふ必要があらうと思ふ。當園にては梅子が辨當を殘すやうな事があつたり又食べないやうな事があれば身體の狀況を考へて見て或は牛乳を與へたり或は汁物を與へて愉快に喫食さす事をつとめた。

(ハ) 入浴

入浴は常には家庭に注意を與へたのであつたが日誌にもあつたやうに次郎に藥湯をして入らした時に梅子にも入浴させたが梅子の精神には少からぬ快感を與へたやうに思ふ。

(ニ) 運動

梅子の運動は不規律である。歩行をしても走つたりゆつくり歩いたりして一定の歩調を以て歩く事が出来なかつた故に始終附添のものに命じては郊外散歩を奨勵

運動

入浴

し殊に河原の散歩を奨励した。又當園では指先の運動より手の運動足の運動といふ風に時々運動させた。

(ホ) 睡眠

睡眠が不揃ひである事は時々附添からの話であつたから當園で特別研究をして見たが一夜だけは寢附が悪いやうであつたが其後は別に寢附が悪いといふ程の事も認めなかつた。さうして其特別研究をした時に予は是れが寄宿し得るならば如何に早く且つ順當に教育し得るであらうかと思つた。獨逸などで識者が補助學校の成績について寄宿制度にするまでは十分の成績を上げ得ないと云つてゐるのも此の邊の消息を洩したのであらうと思ふ。

(2) 教授

(1) 各科教授の準備

梅子の教授については入園半頃からは花子と同様に教授したので重複を避けて

各科教授の準備

茲には記入しないが其前に於ける準備教授について記入するのが適當であらうと思ふからそれについて一通り述べやうと思ふ。其準備教育としては前に述べた養護の如きも特別に準備になる譯であるが茲に述べるのは教室に於いての準備である。例へば國語については發音の練習算術については實物の數へ方などをいふのである。

(ロ) 精神操練

茲に精神操練といふ意味は感覺注意記憶判斷等をいふのであるが感覺については多く視覺の練習をなし注意については豆人形各種の豆の撰擇玉通し輪投げも小梅投げ等をなし判斷及び記憶等については多く文字のカルタ選り數の分解綜合に於ける實物練習等を試みたのである。

(3) 訓練

梅子の訓練については本園が家庭組織を本位としてゐるので外來の通學者には餘程の注意を與へても繼母扱になつた事は事實で餘り多くを要求する譯には行か

精神操練

なかつたのである。故に梅子については管教授上に於いて、教化性があるか否やを實驗した位に過ぎなかつた。それで今梅子の訓練について彼此記入する事柄はないのである。若し強いて書くならば

實踐指導

(イ) 實踐指導

といふ事を記入しておくより道はないのである。かゝる兒童の教育は、方法でなく、教育者其人の生活状態、それ自身が兒童訓練の方法である、彼は家庭に於いて随分悪き感化をうけ、社會に於いて忌むべき俗習に感染してゐるにも拘はず、當園へ通學以來言語動作大に變化を來したのである以上の如くにして

惡癖の矯正

(ロ) 惡癖の矯正

も出來たのである。梅子は惡癖といふよりも精神状態が幼稚であるといふのと病的發作があるといつた方が適當であつたのであるが、小盜癖、惡口無作法、無鈍着、饒舌等であつた是等は、當時々指摘したに過ぎなかつたのであるが、それでも家庭では大に効果のあつた事を認めたのである。

全身強健になつた

とは園醫の認めた所で吾々の目からは肉附がよくなり、血色がよくなつた事を認めためたのである。

(イ) 全身強健になつた

丁 梅子の變化

(1) 生理的並に病理的變化

病的發作の退化

(ロ) 精神病的發作の退化

梅子は通學の往復に於いても取り止めのない事を口走つたので、近所ではあれは氣違ひだといふ評さへ立つたので、實際低度の精神病者であつたのである。然るに何時となしにそれらの言行がなくなつたので、梅子の往復の途中なる人々にまで、えらい變化を表はすものかなと驚かないものはなかつたのである。

(ハ) 睡眠が適度になつた

睡眠が適度になつた

とは附添の訴へてあるが事實さうであらうと思ふ。

(二) 疲労が少なくなつた

梅子の入園當時は何授業をさしても三分間か五分間位より繼續する事が出来なかつたが今ならば十五分乃至二十分は繼續する事が出来るやうになつた。

(2) 心理的變化

(イ) 感覺

梅子の感覺は視聽味觸に於いて著しき低能を認めなかつた時に錯覺を見出すのであつたが教育の結果は其錯覺をして減少せしめた。

(ロ) 記憶

記憶は入園前まで三箇年も某小學校に通つてゐたものが文字は一字も讀めず數の記憶も零であつたが日誌の終はりにあるだけの記憶をする事が出来、又入園當時

疲労が少
なくなつた

感
覺

記
憶

は明日筆を買つて貰つて御出でなさいといふやうな事を云ひつけても歸宅するまでに忘れたが今日では却々よく記憶して用達しが出るやうになつた。

(ハ) 注意

注意の著しく發展した事は愉快である。梅子の入園當時は夢でも見てゐるのではなからうかと思ふ位で輪投げをさしてもお小梅投げをさしても視覺練心機に向はしても殆んど無感覺の状態であつた。お小梅投げをするのも一個づゝ投げるのを兩手に掴み得るだけ掴むて投げるやうな事をしたので注意の集中などは思ひもよらなかつたのであるが今日では却々の進歩である。

(ニ) 判断

以上の如くであるから判断などは殆んどない。管感情的に嬉れしいとか悲しいとか憎いとかいふ判断は出来たやうであつたが知的判断に至つては零であつた。今日では多少の判断を爲し得るやうになつたのは日誌の終はりにある算術問題について知る事が出来る。

注
意

判
断